

Title	七十年の幻影
Sub Title	Reminiscences of my seventy years
Author	守屋, 謙二(Moriya, Kenji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.381- 457
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0387

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

七 十 年 の 幻 影

守 屋 謙 二

は し が き

私の一つの大きな幸福はよき師、よき友、そうしてよき弟子たちに恵まれていることである。このたび私が古稀を迎えるにあたり、友人や弟子たちにより記念論文集を出していただく光栄に浴し、どうして感謝すべきか、その言葉を知らない。一家に大成した友人はいうまでもなく、弟子たちもまたそれぞれの専門領域においてますます新しい業績をあげていることは全く感嘆の至りである。こうした意義の深い諸論文が一冊に纏められることは学界における一つの盛観と称せられるであろう。またこの機会に、私の七十年のつたなき思い出を誌すことが許されて非常な幸と思っている。さて、できるだけ事実に忠実に追憶の筆を進めてみると、何分、往事茫々として、夢かうつつか、見境のつかないこととなり、過去はいわば〈幻影〉のようなものと感ぜられ、それ故にこの一文の標題ができあがったのである。

*

私は明治31年(1898)8月29日、岐阜県大垣市に生れた。大垣は旧幕時代は戸田氏十万石の小さな城下町であった。私が生れた頃はまだ人口二万位の町(大正7年市となり、いまは人口も十三万余)で、その中央の公園には天守閣が聳え、町の西南端から始まり、途中ところどころ紆余曲折はあったが、大体、東北端に終って貫通する一里余のメインストリートがあった。その起点から十二、三町のところで、川に沿って東西に走る、家並は南の片側だけの船町ふねがはじまり、そこには問屋が多く、そのうちに代々

七十年の幻影

金丸の商標の味噌たまり（醤油の一種）醸造業を営む一軒があり、それが私の生家である。私の父は孫八、母は健で、私はその二男である。私の生れた時の家族は父母のほかに、祖母、父の妹、即ち叔母と二年上の兄であった。私の生れた2年後に弟が生れ、また8年後に妹が三人続いて生れ、またそのあとに四人の弟たちが生れ、このように私の兄弟や妹は全部で十人を数えたが、妹の一人は年頃に亡くなり、末の方の弟の一人は塾在学中に病没し、またその下の二人は今次の戦争の犠牲となった。いまは男四人、女二人が健在している。

商家のことであるから、使用人が多く、通いの大番頭、住込みの中番頭を始め小僧、乳母、各種の女子衆（女中）、蔵男にいたるまでいつも二十人以上はいた。商売柄、建物も広く、表通りに面した母屋と袖蔵（米倉と呼んだ）のほか、その奥に坪の内（中庭）があり、それを距でて裏座敷があり、更にその奥に大きな五棟の四十石位はいる大きな醤油桶が幾十も並ぶ蔵があり、それを通り抜けると畑や花壇や洗濯物を干す空地からなる大裏があり、そこに裏門が作られ、裏通りへ出るようになっていた。こうして家屋の建坪は全部で八百三十坪位になるという。また味噌醤油の仕込み（醸造の一階程）の時期（以前は春秋の両彼岸の頃、現今は或る程度に電化さえされているから、そういう季節に限らないという）になると、近在の特定の村の若衆が十名近く蔵男として働きに来たから、来客も交え、家のなかはいつも大変な人数でごった返えしていた。

私は生れるとともに大きな集団生活のなかに育ち、静かに親子水入らずで過ごすということは余りなかった。私の郷里は仏教の盛んな所で、寺院も沢山あり、ことに浄土真宗が多かった。私の家は代々東本願寺派に属し、祖母や父母は熱心な信者であった。朝晩には大きな仏壇の前でおつとめ（勤行）を欠かさなかった。朝はみな忙しいから、晩のおつとめになると家族をはじめ使用人にいたるまで殆んど全部つらなつた。おつとめは日常は親鸞上人のいろいろな和讃の数節、蓮如上人の御文の一章を読んだ。和

讚の方は全部のものが合唱するので、なかなか勇ましいものであった。私は小学校へあがる前にその一部を暗誦し、それが得意でもあった。また私たち兄弟が何か悪戯をすると、きまって仏壇の前でながい間坐らされた。もっとひどい悪戯のときには道具蔵にいれられ、錠前をかけられた。私は幼年の頃は極めて虚弱でいろいろな医者にかかったらしい。遠方でも名医があると聞くと、いつも祖母が人力車に乗せてつれていった。一度は年増の女中が私をねんねこでおんぶして岐阜市の県立病院へ通っていたことがある。東海道線で大垣駅から岐阜駅へ行く途中には掛斐川と長良川との二つの鉄橋を渡る。そのどちらかを通る時、がたんごうがたんごうと大きな音がして私は眼を醒まし、しかも次々に現われる鉄の欄干の間から大きな河が見えるのが何とも不思議な世界であったことを覚えている。

私をはじめ郷里を離れて大都会へ行ったのは京都であったと思うが、その年令ははっきり覚えていない。祖母や父はときどき御本山詣りといって東本願寺へ参詣し、昔から定宿までとってあった。私もそれに同行された筈で、或る時は奈良までもいったことがある。というのは奈良公園では祖母の人力車に同乗して巡遊していた折、鹿が沢山ぞろぞろくっついて来て煎餅をやっていたが、私はその煎餅を喰べたいとだだをこねたことを覚えている。

明治36年の春、私の五才の時、大阪に内国勸業博覧会があり、私の伯父、伯母（父の姉で、養子をとって、分家して大垣駅の近くで米問屋を営んでいた。これを新家と呼んだ）、それに一人の女中とともに私は見物につれていってもらった。この時はじめて食堂車にはいり、また大阪に近づくとも煙突の多いことにびっくりした。博覧会そのものの中味はすっかり忘れたが、いまから思うと、エジプト美術特有の横向きの人物を巧みに装飾化した、多分丸善の大看板や、夜になるとイルミネーションが綺麗であったことが印象に残っている。その時、私たちは文楽の見物で一日を費した。私は舞台の上の出し物や所作が何のことかてんでわからなかった。ただ一

七十年の幻影

つ覚えているのは、背景に大きな滝が落ちていたが、それは十数本の丸太棒に青い水の画を巻いて、それをぐるぐる廻すと、いかにも勢よく水が流れ落ちるように見えるトリックを見抜いていたことである。しかし文楽の見物はどうも退屈になり、私はとうとう大声をあげて泣き出してしまった。伯母たちは困って、女中にいいつけ外に私をつれ出すこととなった。外には御霊神社があって、その境内には神馬の小舎が並び、そのうちの立派な白馬の前へ行き、豆を買って喰べさせることとなり、すっかり私は機嫌をなおし、いつまでもそこにいたかった。私は小さい時から動物では一番馬が好きであった。私はまた軍人さん、とくに騎兵になりたいと志望していたからでもあろう。玩具も剣やラッパが好きであった。

私の町にはその頃まだ幼稚園がなかった。それ故毎日ただ近所の同年輩の子供たちと遊んでいるばかりであった。私の家の西隣りは沢田屋という酒造業を営む、やはり袖蔵のある大きな家で、そこにはまた子供が多かった。そのうち私より一つ年上と、一つ年下の男の児は小学校には行ってからも一番のよい遊び友達であった。年下の児の方は特に秀才で、後になり東大の法科を出て、鉄道省にはいり敏腕をふるい、その後東洋電機の社長となった三輪真吉君である。どんな遊びをしたかといえば、広い土蔵のなかで隠れん坊をしたり、大裏で昆虫を採ったり、植木をいじったりした。

私の家の前の道路の下方には川が東西に流れていた。またその向う側には、やや狭い道路があって、床屋とか指物屋とか商人宿とか比較的小さい家が並んでいて、それを^{したまち}下町と呼んだ。この川は元来堀割りで、大垣にはこの種の堀割りが沢山あった。私の小さい時には川の水は清く、その兩岸の斜面には花壇が作られたり、桜並木があつたり、ところどころには柳の老木が聳えたり、また二町目おき位に橋もかかり、なかなか風情に富んでいた。私の家の前では川岸まで階段（どぼと呼んだ）が作られていた。そのわけは、そこまで製品のための材料の大豆とか、或るいは燃料の^{わりき}割木などを船に積んで来たのを陸上げするためであった。この川には魚もいた筈で、よそ

の子供たちはここで釣りをして、大いに楽しんでいたと思われるが、私たち兄弟は殺生なことは厳禁されていたから、その楽しみを一生知らない。ただ夏には小さな舟が岸につながれることがあり、棹でこいで遊んだ。

ここでもう少し私の生家の周辺について述べておきたい。家の前の川を船町川（この船町川は10年近く前から暗渠となって埋め立てられ、その上は二十何メートルの幅の舗装された立派な道路—国道21号線—となり、日夜トラックやその他の車がけたたましく往復していて、昔の面影は全く消え失せたという）と称し、それを東の方へ三、四町くだると水門川というやや巾広いいわば本流に流れ込む。そこに高橋^{たかばし}という一寸大きい橋がある。この本流は大垣の堀割りの水を殆んど全部集めたもので、ここから十里悠悠と濃尾平野を南へ流れて伊勢湾の桑名へ通ずる。旧幕時代にはかけがえのない交通の要路であった。私の幼時には小さい蒸気船が動いていたことを記憶している。前述の高橋の袂に＜奥の細道結びの地＞という大きな石碑が立っている。またその脇に＜南いせ桑名へ十里ざいごう道＞という風雨にさらされた古めかしい石碑が並んでいる。元禄時代には芭蕉の弟子たちが大垣には沢山いて、そのうちに、弟子というより、京都の北村季吟のもとで一緒に学んだ相弟子と称すべき谷木因という俳人があって、芭蕉との交遊も深かった。この谷家は代々水門川の船問屋を営む名門であった。芭蕉が＜奥の細道＞の長い道中をおえてやっと笈をおろして安堵の地を見出したのがこの船町であったことは当然といえよう。前に掲げた＜南いせ……＞の道標を兼ねた一種の句碑は実は木因の建てたものである。私は小さい時から折に触れ＜木因さん＞の話を知り、ますます郷土の先人に対する思慕の念を深めた。谷家の大きな屋敷は私の少年時代にはまだ水門川に面して残っていた。

前述のように、町にはまだ幼稚園がなかったが、小学校へはいる前に私は少しは字を書くことができた。そのわけは父は商人でありながら文人趣味の書画骨董が好きで、殊に書道にかけては若い頃から法帖や拓本を手本

七十年の幻影

にして独学で研究していたようである。この風潮は大垣藩では旧幕時代から盛んであったと思われ、その影響が町人にまで及んだのであろう。父は子供たちばかりでなく、店員たちにも大いに書道を奨励した。夜になり、大戸をおろし、店をしまると、帳場を片付けて幾つもの机を並べ、番頭や小僧たちはお習字を始めた。私たち兄弟もその間に伍して手習いをした。店員たちがこうして毛筆で手習いをしたことは、ただ趣味からばかりでなかった。私の家はその頃まだ昔風の大福帳を用い、そのほか判取帳など総ての書類も毛筆を使っていて、実用的な方面からもそれが必要であった。大福帳がずらりと幾つもの店の天井にぶらさがり、まだ電灯はなく、吊ランプがさがっていた光景を懐しく思い出す。お習字に厭きると、番頭の一人は火鉢の周りに皆の者を集め、貸本屋でかりた講談本をひそかに朗読し始めるのであった。なかなか名調子で皆聴きほれた。私が〈水戸黄門〉や〈荒木又右衛門〉などの存在を知ったのはこの時である。かようにして幼い時の友達も近所の子供たちばかりでなく、番頭や小僧もそれに数えられるであろう。

小学校へあがる前年、祖母、新家の伯母夫婦、兄とともに私はお伊勢参りをした。古市の^{ふるいち}油屋で泊り、また伊勢音頭を見物したが、この時も私はとうとうやんちゃをいったらしい。その際に二見ヶ浦へも行き、始めて海というものに接し、そのおし寄せたり、引き返えしたりする波を見て、世の中には奇妙な現象があるものと深い感銘を受けた。

*

私は明治38年(1905)4月、即ち日露戦争の終った年に紺飛白の筒袖の着物に袴をはいて小学校へ入学した。学校の門前の東には川が流れ、その向うに少し畑があり、それを越えると長い土塀に囲まれ、数百年を経た松その他の老樹がこんもりと生い茂った〈お鳥屋敷〉があった。これは南北に細長い短形の、三千数百坪もある森林で、その中央には大きな池があ

り、殿様が鴨猟のために営まれたもので、大垣藩特有の名勝であった（現在は住宅地となった）。鴨のほかに各種の鳥類が棲息し、季節により、多数の五位鷺や椋鳥の群が飛びたつことがあり、異様な風景であった。この〈お鳥屋敷〉の更に東方は公園に通じ石垣の上に天守閣が聳えていた。小学校は天保11年に旧藩主が創立された藩学校を受けついでのもので〈興文小学校〉と称した。私の町にはそのほか三つの小学校があったが、そのなかで特に格式を重んじていた。その理由は〈男女七才にして席を同じうせず〉というのか、男女別々にちがった土地と校舎を持っていた。私のはもちろん男子部で、ただ秋の運動会の時だけ女子は男子に合流して来た。従って私は一生男女共学ということを経験したことがない。古い小学校だから、親戚の誰彼もかつて学んだという老先生もいた。そうかといって若い師範出の新進気鋭の先生もいた。

私が小学校へは行ってしばらくすると父は盲腸炎に罹った。いまならばすぐ手術をして簡単になおる病気であろうが、当時は大病であった。主治医などが相談して京都の大学病院から専門の博士を招くことになった。また看護婦も京都から来ることとなった。その上にまた母がお産をする日も近ずいていた。そんなわけで私の家中は余り経験したこともない一種の危機に見舞われたらしい。とにかく騒がしい三人の子供たちをどこかへあずけなければというわけで、兄だけは家にとどまり、私は母の実家へ、弟は新家へしばらく行っていることとなった。

母の実家は旧藩士で、私の家とは全然趣きを異にし、門構えも、玄関も、座敷の間取りなども、昔の武家屋敷の典型的なものであり、屋敷の裏の方はお堀の一部に接し、また母家の北側の縁側へ出ると西北方には築山や老樹の上に天守閣が聳えているのが手に取るように見られた。家には若い頃に上京して西周の塾で学んだことがある祖父はもはやいなく、祖母と母の弟、即ち叔父と母の妹、即ち叔母と、そのほか年老いたばあやと一人の女中だけで、しかも当時叔父は東京へ遊学中であったから、女ばかりの

寂しい家であった。叔母はまだ女学校へ通っていたが、私を大変可愛がってくれた。このことは一生変らなかった。またその後成人してからも兄弟のうちで私だけがときどきこの祖母の家へ泊りがけにいった。4、5箇月経て幸に父の病気もなおったから、船町のわが家へ帰った。母はお産もすまして私たちには一人の妹が生れていた。

私の郷里は濃尾平野の西北部にあるから、郊外は田圃ばかりで単調を極め、山も海も近くない。ただ山の方は一里ばかり西北方へ行くと中仙道の一つの宿場たる赤坂という小さな町があり、その背後には金生山という小さな山が聳え、そこへは小学校の遠足などで数回登った。その頂上からの濃尾平野の展望は一種の壮観である。また南西方にはやや大きな養老の連山があり、そこの滝と溪流を中心とした公園はこの地方では勝景に数えられていた。三里を距てていたから私が始めて行った時はまだ人力車で、しかも泊りがけであったことを覚えている。更に私の町から西北方には、芭蕉が<花にもよらず、雪にもよらず、これ孤山の徳あり>と称した伊吹山が、また北方にはいろいろの山並が、しかもその奥にはよく晴れた日など白雪をいただいた加賀の白山が眺められた。

私は小学校の二年生の時、祖母、新家の伯母夫婦、兄とともに加賀の山中の温泉へ行った。温泉へはいったのは初めてのことである。宿は吉野屋で、たまたま明治時代の書家の第一人者日下部鳴鶴翁が泊り合わせていた。その長い白髭の崇高な風貌には子供ながら心を打たれた。山中のあとには、山代、片山津などと温泉めぐりをした。またその際金沢、福井などの都市をも見物した。前にも述べたことで明かなように、新家の伯母夫婦はよく物見遊山の旅へ出て、また私たちはその恩恵を蒙ったが、そのわけは伯父が元来道楽者で、また米相場などに携わる商売柄から日常の生活も田舎に珍しく派手であった。例えば毎晩のように家へは女将^{おかみ}や若い芸子(芸者)が遊びに来ていた。これに反して私の父は酒も煙草も嗜まず、世間では<律儀者^{りちぎもの}>で通っていた。だからこそ<子沢山>であったのだら

う。もっとも父は客をもてなすことが好きで、私の家ではよく各種の宴会が催された。その時にはやはり四、五人の芸子が来て興を添えた。こういう風習はまた田舎では普通のことであった。

三年生の頃からか、私はゴムマリの野球に興味を持ちはじめ、それに夢中になった。時々夕方暗くなるまで校庭でやった。そればかりか、帰途や休みの日には家の近くでもやった。家から西方へ少し行くと、右側に二ツ目橋という橋があり、それを渡ると、^{ほん}本馬場という可なり広い通りが五、六町長く北方へ通じ、その突き当たりに黒板塀の江月庵という尼寺があった。その境内には梅林があり、その盛りには祖母や近所の友達たちと御馳走に招かれた。この広い通りは旧幕時代には武士が乗馬の稽古をした馬場であり、その両側には士族屋敷をまじえ、小さい家が並んでいた。この通りは小学校へ行く通路にも当たっていたから、特別の親しみがあつた。またこの通りの西方二、三町のところに新馬場が並行して走っていた。この本馬場と新馬場が私たちが野球をやる好箇の場所であつた。もちろん現今のように各種の車が通るわけではなく、極めて閑静なものであつた。小学校も上級になると、自分の仲間だけで野球をやることに満足することができず、ほかの場所や学校へも遠征に行った。

スポーツに関連して水泳のことを思い出す。幼い時は家の前の川へは行ってただじゃぶじゃぶと水をかぶっていた。少し大きくなると、川を一町余り溯ると堰（^{せき}せいぎと呼んでいた）があつて水量も多かつたから、町の悪童たちが喜んで泳いでいた。これは隣の造り酒屋が、その材料の米を搗くために、この水を川と並んで引いて来て大きな水車を廻すために利用していたからである。冬の夜、一晩中この水車がきしむ特有の音を立てて廻り、一層静寂さを増すのであつた。この^{せき}せいぎで満足しなくなると、大垣の西の町はずれにある杭瀬川という少し大きな河まで十数町歩いていった。そこに塩田橋がかかり、この橋の袂に旧幕時代には仕置場があつたとも聞いている。この橋の上流は河幅がだいぶ広くまた水も相当に深かつ

た。簡単な飛び込み台まで出来ていた。昔は武士の子供たちの水泳場であったという。明治になり中学生たちがそこで楽しんだ。私は小学校の上級になると、兄にくっついて泳ぎに行った。泳法は神伝流であった。

私の父のことは前に一寸触れたが、私の母は父とは全く反対で、趣味、娯楽というようなことには殆んど無関心で、日常のみなりは地味であることはもちろん、髪こそいつもきちんと丸髻に結わせていたが、お化粧は全く施すことなく、また殆んど外出することもなく、ひたすら沢山の子供の養育にかかりはてていた。ただ近所とか親戚とかに結婚式などがある時には盛装してお白粉をつけてもらった。女中たちは<奥さんはやっぱり美しい>などと陰口をいっているのが聞かれた。また母は寡黙で余り無駄口をいわなかった。それでもすっかり使用人たちの心を見抜いていて、大変恐れられていたらしい。私は或る時、母とともに道具蔵の二階へあがっていた。母は一つの箆笥の前へ行き、引出しから一と振りの短刀を取り出した。<これはわたしがお嫁に来るとき持って来たものだ>というような意味のことをいったが、いつも静かでやさしい母の心の底には何か厳しいものがひそんでいるわけをじかに感じたように思った。母は商家の妻には一寸ふさわしくないところがあったに反して、父方の祖母は純然たるその典型的なものであった。また嘉永年間の生れであるからすっかり徳川時代の人であった。眉毛は剃りおとし、昔はお齒黒をつけていたということであり、小意気なところもあった。お愛想もよく、来客を好んだ。祖母は各種の邦楽がすきで、桃割れにゆい黒襟をかけたその娘、即ち叔母の嫁入り前には、なかなか派手作りで、娘に三味線や踊りなどを習わせていた。私は小さいとき祖母と一緒に床につき、その隣りには叔母が寝ていた。夜になると家中の灯火はすっかり消されたが、ただこの祖母たちの部屋だけは行灯あんどんがとぼされていた。また祖母はよく外出した。お寺参りなどが多かったであろうが、特に殆んど毎朝といってよい位にお朝事あさじといって近所の寺へお参りした。その寺は家の西隣りの沢田屋を更に西へ行くと、表具屋と料理

屋が並び、そこを左へ折れるとこの奥に山門が見え、この寺は境内も広く、また本堂はじめなかなか立派で東本願寺派の誓運寺と称した。代々学僧を出だし、明治時代にはじめてサンスクリットをイギリス留学からわが国へ伝えた有名な仏教学者南条文雄博士の生家である。そこで毎朝簡単な説教があったらしい。祖母や叔母は冬になると紫縮緬の御高祖頭巾をかぶって外出したが、母にはそういうこともなかった。いずれにしても母と祖母叔母たちとは全く対蹠的な存在であったことを私は子供ながら感じていた。

一般に年中行事についての興味や印象は幼い時から特に小学生頃までの間が一番強いようである。私の郷里にも旧幕時代からの古い伝統があるだけに四季を通じいろいろと特殊な祭典や行事が多かった。まず仏教から始めるのも変だが、前述のように私の生家は信心家というので世間にも通じていた位だから、一年中いろいろの仏事が絶えなかった。先祖の誰彼の法要が次々に営まれ、その都度、坊さんが読経をし、それも一人だけでなく、重要な場合には檀那寺（町から一里ばかり東方の田舎の唯頓寺といった）のほかの寺からも数人やって来た。そういう時は親戚縁者も集まり、あとで、精進料理が出て、子供たちには一種のお祭りのようであった。また時々お客僧という者が泊まり込んだことがある。それは町の諸所の寺で説教をするため、多くは北陸地方から来る坊さんであった。そういう方を私の家で接待した。いろんなタイプが見られたが、ただ一人私に深い感銘を与えた方があった。姓は河崎、澹々星と号した文人画の上手な、また坊主臭が全然ない清潔で枯淡な老人であった。説教をしないときは一日中二階の客間で画筆を執っておられるのを遠くから拝見していた。この方は壮年時代に上海の東本願寺の別院に派遣されていて、その余暇に中国の本場で文人画を修業されたという。説教は、寺のほかに俗人の家でも行われた。例えば私の家など母屋の各部屋の襖や障子はいうまでもなく、一部の押入まですっかり開放することができるような構造になっていて、従って奥の座敷から店先まで何の隔壁もない百人以上を容れることができる大広間と

七十年の幻影

なった。そこへ多くの爺さん婆さんの信者が集まって、仏壇の前の高座にすわった坊さんの説教を聴いた。前述の南条博士も再三来られたことがある。また町の信心家で大きな商人であった七、八軒が宗教を中心にして一つの講中を作って、それを^{ぜんこうこう}〈染香講〉と称した。お互に親戚以上の附合をしていた。普通の法要はもちろん、殊に11月の親鸞上人の命日、即ちお取越とりこしの時節になると、寺ではいうまでもなく、染香講の各家でもこの最大の仏事を順々に勤めた。そのとき特に印象の深かったことは、普通の読経のほかに、親鸞上人の一代記が節をつけて朗読され、また床ノ間には二幅対になった上人の御絵伝が掛けられた。それは立軸で、画面は上下に数段に分たれ、そこに上人の生涯の諸場面が順々に大和絵風に描かれていた。このお取越の最大のもは伝馬町にある東本願寺の別院(ご坊さんと呼んだ)で行われた。その門前や、長い石畳の参道の両側には各種の屋台店が並び参詣人で雑踏していた。そのうちで特に興味を惹いたのは植木市であって、それを目当に近所の友達とともに毎年遊びに出かけた。小学生の頃は植木をいじることがますます好きとなり、また植物採集なども始めていた。

上述の誓運寺へはいる横町の西側には当時大垣一番といわれた呉服屋和多治があり、その西隣りには砂糖問屋丸十とその別家の豊表問屋が並び、そこから左へはいるせこ(横町)があり、南方へ誓運寺の本堂の裏を歩いてゆくと、次には清念寺という小さい浄土宗の寺がある。この寺には4月8日のお釈迦様の誕生日に本堂で甘茶が出て、また地獄極楽を描いた一種の稚拙な六道絵が掛けられた。私たちは恐ろしいものを見たさに小さい時から見物に行った。この寺を過ぎると、東西に延びた裏通りと交叉し、更に南へ進むと左側に^{さんまい}三昧(墓地のこと)があった。しかしその西南方は広く開けた一面の田圃であった。殊に春になると、菜の花の黄色やげんげ(紫雲英)の薄紫色や麦の緑色で彩られて、それこそ絢爛たる絨毯を敷いたように美しかった。そのはるかかなたには小さな農村がいくつも点在し、そ

これらの西方にはおおいかぶさる ように養老山脈が大きく南北に続いていた。ここまですれば町を離れて郊外となり、始めて田園風景に接することができた。(現在はすっかり変っていることであろう)。

墓地のことに触れたから、私の生家の墓についていえば、実は東本願寺派では各自の家の墓というものを殆んど認めなかったらしい。というわけは、遺骨は京都へ持って行って、東山の大谷派の御廟か、或るいは、御本山の本堂の須弥壇のなかへ葬ってもらうのを常とした。これは信仰を一つにする御同行^{ごどうぎよう}として、教義上こうした処置がとられたのであろうが、また本山を中心とする一種の政策からでもあったのであろう。それ故に私の家ではどんな機会にもお墓詣りをしなかった。そのような時にはいつも京都へまで出向いた。

私の郷里の人たちの一般に見られる一つの通有性は地震恐怖症ともいべきものである。その理由は明治24年10月28日早朝にいわゆる濃尾大震災があり、その中心地に一番近い都会は大垣であった。災害も一番大きく沢山の死傷者を出し、民家の倒壊や火災も大きかった。私の家は幸に死傷者はなく、家屋はただ道具蔵一つを残して全部倒壊したが、火災にはかからなかった。このようなわけで、一寸の地震にも非常に敏感ですぐみな外へ飛び出した。毎年10月28日の朝を一種特別の厳粛な雰囲気の中に迎えた。死者の出た家では法要が営まれ、それが町中の隨所に見出されたからでもある。また明治42年の8月、私の小学校の五年生のとき近江の虎姫の地震があり、一寸大きいものであったから、中庭の石灯籠が倒れたりした。ときどき余震もあり、数夜は家の者はみな大裏で野宿した。こんな実際の経験もあり、地震恐怖症はますますつづいた。私の少年時代にはそれが特に顕著であった。夜、床についてからも人間の地上生活など浅はかなものと感ぜられ、いろいろと想像を逞うし出すと、なかなか寝つかれず、しまいには地球そのものが崩壊して、宇宙のなかへほり出されるような絶望的な心境にまで立ちいたった。こういう一種の幼い無常感が後年になり私が仏

教を研究したい気持に馳り立てられた一つの遠因であるかも知れない。

さて、一般の年中行事であるが、1月の元旦には私たち小学生は紋附、袴で学校の四方拝の式へ列して帰ると、家中は主に支店や縁者から沢山の大人たちが集まって酒宴を開いていて、別に普通と変わったことはなかった。ただ殆んど毎年暮から祖母と新家の伯母は京都へ行って、御本山の元旦のお参りをして、午後には帰って来たから、それを私たち兄弟は駅へ迎えに行った。2日は商家は初売で朝早くから大騒ぎとなり、次々と初荷の車が威勢よく送り出された。正月の七草の行事なども家では別に特別なことはなかった。一般に本願寺派では専ら法要などの仏教に関する行事に重点をおいて、その他の普通の行事を軽視する傾きがあったと考えられる。ただ子供たちは歌留多とか独楽とか凧揚げとかで遊んだことはもちろんである。私は特別の格好の凧を作らせ、それを揚げるのがなかなか上手であった。おかげで冬になると両手の指はしもやけでふくれあがっていた。正月の何日かにはきまって前述の呉服屋和多治では大きな歌留多会が催された。そこには私より二つ年下の男の児と、すぐその下にはお千代さんというとても可愛い女の児がいた。いかにも呉服屋の子供にふさわしいと感じていた。3月3日のお雛祭にもそこへ招かれることが一つの楽しみであった。というのは私にも三人の妹たちがあったが、年が離れ過ぎていてまだ遊ぶということなどはなかった。また隣りの作り酒屋の大裏には稲荷神社が祀ってあって、初午の日には大勢で一日中太鼓をたたいたりして面白かった。町の公園のなかには藩祖を祀る常盤神社やまた招魂社や大神宮があって、そのうちのいずれかの祭典が3月の末にあった。母の実家の近くでもあるから、喜んで行った。夜お堀の上では仕掛花火があって綺麗であった。5月のお節句は、兄弟が多いからなかなか派手であった。二階の広間の床には沢山の武者人形やその他の飾物を並べた。また大裏には長い大きな木の柱を立て、いくつもの鯉幟や吹貫ふきぬきを風になびかせた。大きな鯉幟になると、口からおなかのなかへは行って遊ぶことができた。

お祭りの一番大きなものは5月14、15日の大垣祭である。商家の町にはそれぞれ山車（単にやまと呼んだ）があり、全部で十町十輛を数えた。銘銘に異った趣向がこらされており、またそのためにはいろいろの囃子があり、それを殆んど一箇月ほど前から町内で稽古をはじめていたから、お祭り気分は早くから町全体に漲っていた。特に昔、殿様から賜わったという三輛のやま、即ち神樂山車、大黒山車、蛭子山車は格も高く、特定の町が三輛のうちの一つを4年目かに担当することになっていた。私の船町は蛭子やまを担当し、私が小学三年生の時にその順番が廻って来ていた。きまった歌詞があり、それに笛、大太鼓、附太鼓、鉦などの鳴物が加わった。鳴物は年順にわりあてられ、私は附太鼓の組であって、毎晩その稽古が行われた。またお祭りの当日になると蛭子やまに出る大人や子供は、青い波間に赤い大きな鯛が跳びはねる模様の、揃いの浴衣を着て喜び勇んでいた。こういうことは町人の子供にのみ許された楽しみの一つでもあった。なぜかといえば、大垣には主として士族が住んでいた割に小さい町がいくつも残っていた。そこにはこういう種類のやまも遊樂の稽古もなかった。明治のその頃、学校などへ提出する諸種の書類には、姓名の上には必ずく士族>とかく平民>とかの族称を書き添えた。いまから思うと一寸不思議だが、事実であった。士族の子はいつもわれわれ平民の子を軽蔑していたが、上述の特権はなかったようである。お祭りは大垣の町全体の氏神である県社八幡神社が中心となった。この社は町の西北方の外側町にあった。15日の本樂にはまず全部のやまがそこに集まり、殿様の三輛を先頭に、十輛の町人のやまが続き、そのあとに神官たち、次に三基の神輿の渡御があつて、その行列が順々にやまのある町内を廻って歩いた。私の船町は町も大きく、従つてやまも大きく、屋台の上で小娘たちが踊ったから、<踊りやま>と称した。

次に重要なのは夏祭りである。大垣では商人の町にはそれぞれ一つの小さな神社が祀られ、例えば私の町には愛宕神社があり、町の一番西のはず

れの築山に祀ってあった。それらの神社を中心に夏祭りが行われ、7月、8月には殆んど毎晩といってよい位順々にあった。大人たちは夕涼みを兼ね、浴衣がけで団扇片手に遊び歩いた。子供には一つの余り類例のない行事があった。それは灯籠箱(車のある高さ三尺位、巾二尺位の長細い木箱)を長い綱をつけて二十人ばかりの子供たちが引張って走り、箱の後からは大きい子供が二人位で梶^{かじ}を取った。引張る方の子供たちは片手には細長い鉄の棒の先に円い赤い提灯のついたものを捧げていた。走りながら子供たちは<エントコドッコイ、ヨイヤサージャイ>と大きな掛け声も勇ましく叫んだ。このようにしてお祭りのある町まで走り、まずそこの昔からきめられた一軒の商家へ行き、その軒先にある木の枠のなかに例の箱の十箇位の灯籠をつけて、一晚じゅう蠟燭の火をたやさなかった。それから神社へお供物を捧げた。こうして私は夏祭のおかげで殆んど大垣全部の町へ遊びに行き、その町特有の気風のようなものを観察することができた。

秋になると運動会があったが、別に述べるほどの特色はなかった。

これは行事ではないが、郷里の思い出の顕著なものの一つに数えられよう。東海道線に沿う大垣駅では全部の列車が停車した。それは、これから西方の関ヶ原駅へ向って急勾配であったから、列車のあとを押す別の機関車を付け、或るいはそこへ水を補給する必要がある技術上の理由からとも聞いていた。それ故に皇室の御用車、特急車などみな一寸停車した。前述のように、私が小学校へはいったのは日露戦争の終った年であるから、それから続々と軍人たちが晴々しく凱旋して来た。そのなかには大山元帥、乃木大将そのほかの沢山の武勲に輝く将軍やまた伊藤博文などの政治家があり、大垣駅を通過される時には町全体の中小学校の生徒が駅の構内に集って送迎した。こういう機会に私は明治天皇に最敬礼をしたことも数回あったように覚えている。尤も中学校の三年生以上になると武装していて捧^さ銃をしたものである。

私の小学校の頃まではまだ多分に旧幕時代の面影が残っていて、夜など

提灯をつけて歩いた静かな城下町であった。しかし文明開化の波は次第に押し寄せて来た。まず電話が引かれた。幼いとき私の家の前の道路には電柱というものはなかった。ところが或る日、長い円い柱が一定の間隔をおいて次々に横たえられていった。町の人びびりした。これが電話のための電柱であることを知って全く喜び勇んだ。電話器ははじめ電話室と称する押入のなかに設けられた。電話の次にはガスが引かれた。ガス焔爐で家族のためだけの煮物ができて母は大変喜んだようである。というわけは、私の家はいつも二十人以上の多人数であったから、御飯は普通の釜では間に合わず、はそりという大きな鍋のようなもので燗いた。次に電灯がついた。私は或る午後、中庭に面した縁側で友達と遊んでいたとき、家のなかから誰かがくあ、電気がついた>と叫んだのを聞いたから、座敷へはいると、その真中に本当に電灯がついていた。一種の奇蹟に出会ったようにみなで深い感歎にひたった。ただ電灯が取り付けられたのは、店をはじめ階下の部屋だけで、二階にはまだそういうことがなかった。私は中学校へは行ってから二階に勉強間をあてがわれたが、三年生になる頃まではまだ机の上に置ランプをおいて使っていた。そのガラスのホヤを自分で毎日掃除するようにいつけられていた。水道について大垣には特別の好条件が備わっていた。それは地下水が豊富なことで、昔は井戸は数間掘って竹の筒を差せば、地上まで清冽な水が湧き出で、それを順々に三つの水槽にわかち、昼夜をわかたず新鮮な水が流れていた。しかし次第に濫掘することとなり、<百間掘り>とって随分深く掘る必要が生じた。またこの豊富な地下水のために沢山の工場が集まり、いまでは一種の工場都市として発達するようになった。子供の頃、私の家には四つの井戸があり、大裏の大きな水槽では泳いだりした。

このように私の小学校の頃に、日常の文明の利器は大抵出そろっていた。そのほか、大人の自転車（子供のそれはまだなかった）に右脚を車体の間に引っこんで横乗りをはじめた。また始めて活動写真を観たり、蓄音

七十年の幻影

器を聴いたりしたのもその頃で、それにはいろいろの懐しい追憶が伴っている。

小学校を通じて私は成績も割合によく、ずっと級長を勤めた。それは習字、図画、手工、歴史などが得意で、またそうした学科が重んぜられたからである。そうかといってなかなか腕白で、喧嘩早いところもあり、両親に＜謙二は手が早い＞とよくたしなめられたものである。これは私の兄がうちにいて本ばかり読んでいて、極めておとなしかったからでもある。これに反して私は殆んどそういうことがなく、母はそれを心配して＜日本少年＞という雑誌などを取ってくれたが、私は文章を読むことなく、ただ挿絵を見るだけであった。小学校の或る時期に校長は土方^{ひじかた}先生であったが、この方は鎌倉の近代美術館長土方定一氏の父君に当り一つの奇縁である。

明治43年、即ち私の尋常六年生のとき興文小学校は創立70周年を迎えることとなった。盛大な記念祭が行われた。明治以来この学校は沢山の有為な人物を輩出し、殊に学者が多く、いまでこそ博士は珍らしくないが、始めて博士の学位令が定められた頃は極めて貴重な存在であった。その頃すでにこの学校の出身者のなかからは各専門にわたり多数の博士が出ていて、大垣は別名を＜博士町＞と称せられた位である。因みに故川合貞一先生のお宅は東方に一里以上離れた揖斐川の畔の田舎（いまは多分大垣市に編入されていることであろう）であったが、やはりこの学校でお学びになったと聞いている。この記念祭の式典が行われたのは雨天体操場で、全生徒の前では沢山の先輩の来賓が立たれ祝辞を述べられたが、そのうちで特に印象的であったのは、もう老年の小原男爵が声涙ともに下るというのか、感激の余り本当に涙を流して話されたことである。この小原という方は維新前後において大垣藩を巧みに勤王派に導いて功績のあった家老の小原鉄心の令息であり、＜鉄心さん＞は郷里では大変に尊敬されていることはいうまでもない。この方は他面に非常な風流人であり、その書にいたっては瀟灑洒脱を極めたものである。私の生家の二階の一室に＜心外無法満

目青山>という草書の大きな額がかかっているが、ひとり彼ばかりでなく、書道そのものの傑作の一つと私は思っている。また町の北郊には大きな梅林に囲まれた<無何有荘>という風雅な彼の別荘が残っていて、私は若い頃からしばしばそこを訪れ、ひどく心を打たれた。ただいまは周囲にいろいろの工場が建てこんでしまった。

*

明治44年(1911)4月、私は県立大垣中学校へ入学した。この時はじめて黒の小倉のジャケット型の制服を着て、脚には白い麻のゲートルと短靴をはいた。また帽子は徽章のほかに二本の白線が巻いてあった。中学校は西北の町はずれにあって、道のりも小学校よりやや遠くなった。中学校へは行ってまず感じたことは、小学校のときのクラスメートは幼いながらも都会育ちで感触が柔らかく、ユーモアにも富んでいたが、中学校では近在の田舎から来たものが多く、よく勉強はするが、どことなくみな固苦しいところがあった。殊に校長はじめ諸先生がいわば官僚的で、また教育の仕方も真面目、真面目と無暗に詰め込む主義であった。学科の種類にしても私の嫌なものが多くなり、例えば各種の数学、物理、化学などは全く苦手であった。英語、国語、漢文はまあまあであった。ただそれらをいわば救ってくれたものは習字と図画であった。いまでいえばクラブ活動として習字の<臨池会>、図画の<洋画研究会>があった。私は入学早々この二つの会にはいった。前者の会長は大野百錬先生であった。この方は停年退職後は書家として立たれた。極めて朴訥で謙遜な人であるが、何分その実力がものをいい、すぐ世間的にも認められた。私が塾へは行ってからは、わが国でも泰東書道院はじめその他多くの書道会が作られ、その主催で上野などで盛んに書道展が開かれ、先生はその審査委員にも選ばれ、よく上京されることがあった。当時、先生は京都大学の内藤湖南から関西第一の書家と折紙をつけられたほどである。特に先生の草書は日本一と称すべきであ

ろう。この先生は中学校では漢文と習字を担当され、習字の手本は一年生は前述の日下部鳴鶴の楷書の千字文、二年生はその行書、三年生はその草書であった。臨池会は殆んど毎月一回あって、その時には会員は全紙或るいは半折に任意の書体で主に漢詩を書いて来て、それらを一室に並べて先生の批評をしていただいた。前述のように習字の手本は鳴鶴のものであったが、家ではいつもいろいろと父から指導を受け、江戸末期の京都の書家ぬきなすうおう貫名菘翁が一層立派なものであり、その各種の法帖を与えられ習字させられるばかりか、父は菘翁の詩軸を沢山に所有し、それをときどき床ノ間にかけて、その読み方とか書法とかについて講釈もしてくれた。事実、その頃菘翁の書はわが家では最高の芸術作品であった。また彼の謹厳にして雅趣に富むく清慎勤という行書の額がいつも階下の座敷にかかっていた。更にそれ以上に溯って弘法大師の書とか王羲之のそれについても知らされていた。或る日、父は私に一卷の天平の写経の複製を与え、これを習えといい、また私は拓本により六朝体の味わいということも教わった。父はく鳴石>と号したが、兄にはく幽石>、私にはく雲石>とそれぞれの雅号をつけてくれ、またそれとともに関防印をはじめ一揃いの石印を作らせた。く雲石>とは何となく爺むさく、はずかしかったが、いまなら丁度ふさわしいかも知れない。

また洋画研究会の会長は樋口先生といって、若い頃にはアメリカで苦学されたと聞いていたが、学校では図画と用器画を担当された。会員の作品の種類は油絵はまだ試みられず、水彩画とパステル画が主で、私はパステルはなかなか面白いと思った。私は原色の複製でレオナルドのくモナ・リザ>とベックリンの骸骨をもったく自画像>をどうかして手に入れ、それを模写したことがある。しかし私は町のなかばかりで育ち、自然の風景には親しむことは少かったから、画題は専ら静物に限られていた。一度は母の実家から兜を捜し出して来て、ワットマン紙に水彩でかいたことがあるが、なかなかむつかしかった。この会員には一つの特権があって、それ

は会長が前から購読していたイギリスで出版の、当時としては大変珍らしかった美術雑誌〈Studio〉を会員たちは二、三冊ずつ借り出すことができた。折から印象派の作品もぼつぼつ載り出し、私はこの雑誌によってはじめて西洋美術の魅力に接することができた。

毎年9月17日には〈皇太子殿下下行啓記念日〉というものがあつた。それは私の入学以前に何かの機会に大正天皇の皇太子のとき、この中学校を参観に来られたことがあり、それを記念して学芸奨励会のようなものが行われた。学芸といっても書道と美術が主で、それらの生徒の作品の展覧会があり、また数人の佳作には銀メダルが与えられた。銀メダルが五箇たまと金メダルがいただけた。私は三年生のときにはもうその金メダルをもらったから、それ以後はこの種のことに熱情を持たなくなり、四年生になると出品することをやめた。

小学校の時あれほど夢中になっていた野球を、中学校ではどうしてやらなかったかと不思議におもわれようが、実は私は入学と同時に、野球好きの友達とともに野球部へはいつたのだが、その最初の堅いボールを使ってのキャッチボールの際に右の親指を突き指をしたから、その痛さにこりこりして、とうとう野球を断念したのである。もしこんなことがなければ、ずっと野球をやつて一とかどのスポーツマンになっていたかも知れず、従つて私の人生のコースも別な方向を取つていたかも知れない。一寸した〈偶然性〉は奇妙な力を持っている。

中学校では毎春、修学旅行があり一年から三年まで私はそれに参加した。制服に草鞋、脚絆、握飯を白い布でたすきに背おつて、一日七、八里を歩き、二、三泊で近県の諸名所旧蹟を見物した。そのとき、ひどい雨に降られ、東海道の鈴鹿峠^{すゞか}を越えたことがあり、或るいは近江の賤ヶ嶽に登り、そのあとに琵琶湖の竹生島へ立ち寄り、帰りの汽船では嵐に遭つたことなどを記憶している。

中学校ではその頃、〈お稚児さん〉といつて、上級生が下級の美少年を

可愛がることがはやった。これは旧幕時代からの風習であったかも知れない。母はそれを大変恐れて、私たち兄弟が放課後に外出することを厳禁したといってよい。従って文房具や書籍など必要な時は小僧に買いにやらせた。書籍など新聞、雑誌で新刊書を知っても、それだけでは十分にわからない。それ故、その頃町に三軒あったうちの一番大きな本町の上田書房へ小僧をやって見はからいで新刊書を五、六冊借りて来て、そのなかから選択した。家の者は呉服ものなどもこれに似た流儀で求めていたからであろう。

兄は中学校へはいってからいよいよ文学を愛好し、盛んに小説類を耽読していた。＜文章世界＞からとうとう＜三田文学＞を購読することとなった。特に永井荷風に魅力を感じていたようである。また与謝野夫妻、吉井勇、木下杢太郎、鈴木三重吉などの作品はみなそろえていた。自然主義よりは浪漫主義の方が好きであったらしい。早くから兄は短歌を作り、後年になると俳句に転向したが、それらの作品数は莫大なものであろう。私は兄と机を並べて勉強していたから、見よう見まねに文学書の味を知ることとなった。しかし私は三年生の終り頃になると思想的なものに興味を持ちはじめ、哲学というものがあることを知った。丁度その頃オイケン、ベルグソンと並称されて、それに関するジャーナリスティックな書籍が沢山出版された。それらをとにかく購入した。ベルグソンはわからなかったが、オイケンの理想主義は少しわかり共鳴することができた。安倍能成先生のお訳しになったオイケンの＜大思想家の人生観＞の大著を苦勞して求めたのもその頃であった。しかし到底歯が立たなかった。それから宗教というものにも関心を抱くこととなった。高山樗牛の感化か、日蓮上人にも一寸心を惹かれたことがある。また父の蔵書のなかに、東京本郷の浩々洞で＜精神界＞を発刊し、また若い学徒を養い、一種の宗教改革をはかった真宗大谷派の哲学者清沢満之のいろいろな著書を見出し、その精神主義に深い感銘を受けた。

中学四年生頃、私は三田派の片野脱牛訳のペルシアの詩人オオマア・ハイヤムの四行詩集〈ルバイヤット〉を愛読し、その四行の詩形をまねて沢山の幼い詩を作ったことを覚えている。その夏休みには、前にも行ったことがある愛知県知多半島の尖端にある内海^{うつみ}へ、父方の叔母や兄弟たちや番頭と海水浴にいった。そこは幾分南国的な情緒があり、ユーカリの大樹がよく生長していた。それはなかなか気に入り、私の四行詩を集めて、一冊に自分で製作し、表紙もかいて、題名を〈ユーカリ樹〉と名づけた。

父は商人でありながら金銭を蔑視し、従って人間で大切なことは財産や地位ではなく、人格であることを強調し、折に触れて私たちにそれを説いた。実際の父を見ると、商売の方はすっかり番頭たちに任せ、自分は専ら例の文人趣味的な書画骨董に没頭し、また前述の養老の滝や溪流やその周辺の風光が文人画の山水をそのまま現実に表わしているとでも感じたのか、そこにユートピアのようなものを見出したらしい。父は四季折々そこを訪ね、或る美しい月明の晩などは、すぐ人力車を命じ私をつれて養老へ行ったことがある。遂に父は養老の滝を詠じた幕末の大詩人たる梁川星巖（大垣の近在の出身）の行草書の詩幅を手に入れ、それをわざわざ東京より井龜泉などという著名な石工の徒弟二人を招いて彫らせ、滝の畔へ詩碑を建てた。そればかりか、溪流に沿った勝景の地を選び、いくつもの巨岩を足場として柱を組み合わせ、その上に茅葺の一室は全部檜造りで、扁額や聯や円柱や欄間や手摺などは中国風を擬して装飾された。その他の数室は日本風の座敷である。中国風の一室は〈貯月居〉と号した。こういう小さな別荘を作り、父は田舎の当時の文人墨客を招いて楽しんでいった。私たちも好き放題なことをして、学校の方の勉強は全くおろそかになったことは当然である。兄は跡取^{あととり}でいずれは家業を継ぐから、何をしてもかまわないが、私は冷飯^{ひやめし}だから、将来は自分で独立して食ってゆかねばならない。しかし当時の私の家庭の事情や生活環境を顧ると、そんな必要も余りなさそうで、切実性が感ぜられなかった。

中学校の四、五年生になると、同級生たちは将来の職業のことを考えはじめ、それがために一定の勉強を盛んにするようになった。寄るとさわると、どこの学校がよいとか、どんな参考書がよいとかいう話ばかりであった。

一体、大垣という所は城下町のせいでもあろうか、明治時代から極めて官僚的で、官吏とか軍人になるのが理想であり、それがためには官立学校へはいるのが順当であった。事実、貧しい士族の子弟も奨学金とかその他の手段を講じて官立学校へはいり立身出世するのが何よりの人生の目的であった。この風潮が私の中学時代にも一般に漲っていて、学校といえば高等学校（旧制）或るいは陸軍士官学校、海軍兵学校であり、誰も彼もこういう学校を志望し、またそこへ入学すれば英雄のように崇拜された。

私はそんなことには全然無関心で、それよりは人は何のために生れて来たとか、人生の意義は何ぞやとかいう、いわゆる人生問題に日夜心を痛めるばかりであった。その頃誰の訳だったか、トルストイの＜人はいかに生きべきか＞という本があり、その英訳本まで手に入れて読みはじめ多少理解できたのがうれしかった。トルストイの無抵抗主義とか人道主義とかにかぶれたようである。だから学校へ行っても殆んど友達もなく、休み時間には校庭の一隅に佇んで、西北方に高く聳える伊吹山の頂上とにらみっこばかりしていた。同級生たちからは私は奇人、異端者、或るいは馬鹿者扱いされた。前にも触れたが、体操は兵式体操で、三年生以上になると一人に一挺ずつ村田銃をあてがわれた。それを錆びないように常に掃除しなければならなかったが、私はいつもそれを怠っていた。また年に何度かは岐阜の聯隊へ行つて実弾射撃をした。私は無抵抗主義を實踐してそういう時には欠席するのが常であった。それ故に体操の点はきまってビリであった。またビリをもらったのは修身と作文の点で、これまた生嚼りの哲学を書いたらしい。しかし私はここで深く反省してみると、仏教もその根本とするところはこういう意味で一種の人生問題であるべきであり、単に死後

の極楽往生の信仰を説くだけのものでないことを知った。まず私にとっては仏とは何ぞやという問題が目前に大きく浮びあがった。幼年の時から仏教的雰囲気濃厚ななかに育ったことが無駄でないとも考えられ、ともかく仏教の本質を究明することが私に課せられた大きな仕事と思われた。

四年生頃から一人の親友ができた。それは近くの医者之家に下宿する小川 信君で、まず文学上の趣味も共通していたし、またいわゆる立身出世を希うタイプでなかったようである。彼は私の勉強間へも時々遊びに来たことはもちろんだが、また私も一度は彼の田舎の家へ泊りがけで遊びに行った。いま50年以上を距てて特にまざまざと思い出すことは、放課後すぐ帰宅して制服を和服（必ず袴を附けた）に着換え、彼と一緒に郊外へ出て田舎道を方向、目的も定めず無鉄砲に暗くなるまで歩き廻ったことで、途中ぼつぼつ話をしたが、お互に無口の方であり、その内容もたいしたことはなかったようである。私が余り人と交わらなかったから、＜孤独は死である＞と彼が忠告してくれたことをただ一つ覚えている。彼は卒業後、小学校の先生となって校長も務め、いまは引退して、名物の富有柿の果樹園などを営み、郷里で悠々自適の生活を楽んでいる。またその時、私の郷里の田舎道を歩いていろいろの村落や小さな町を見聞したために、私の郷土に対する思い出は一層豊富になったように思われる。

*

大正5年（1916）の3月、私は中学校を卒業し、いよいよどこか上の学校へはいらねばならぬ。前記述べたように、仏教の勉強が私の最大目的であったから、京都の東本願寺派の大谷大学へ進むことに決心した。それには世間の人たちや同級生たちは全く驚いたようである。しかし父はじめ家の者たちはとにかく賛成してくれた。南条博士がその学長であったことがその理由の一つかも知れないが、また京都を遊学の地に選んで許されたことには潜在的というべき理由があった。私の郷里は元来上方の文化圏に

七十年の幻影

属し、日常の習俗や流行をはじめ、趣味や学芸などみな京都からの影響、感化を受けていた。これに反し、東京の文物は<東夷^{あづまえびす}>と称して、やや軽視する傾向があったことは争われない。

4月の始め、私は父に伴われ京都へのぼった。父は機会さえあれば京参りは何よりの楽しみであった。大谷大学は9月までは予備課程のようなものがあり、まだ本校ではなく、伏見の近くにある真宗中学の一部で行われ、学科は宗乗（浄土真宗の教義）と余乗（仏教の他の宗派の教義）との二つにわかれていた。また宿は下京の、江戸時代よりあった高倉学寮の寄宿舎へはいらねばならなかった。一室に三人ずつであった。また制服があり、いうまでもなく法衣で、黒のカシミア製で、それに輪袈裟というものを首から掛けた。墨染の衣とまではゆかないまでも、それに近いものであった。それを着て、都大路を濶歩するのは一寸引目を感じたが、また一種の誇りでもあった。その時、学んだものに、東大寺の凝然^{ぎょうねん}の著した<八宗綱要>があり、木版和綴の大きな本で、仏教各宗の教義の要点を述べた入門書で、私には大変興味があった。

9月からいよいよ本校へ進むこととなった。それは洛北、鞍馬口の郊外の田甫の真中にあり、立派な赤煉瓦の二階建ての東西に長い校舎と図書館と、その背後にある木造の寄宿舎が主な建物であった。ここもまた全寮制度で、一室に二人ずつ入れられた。一年生の学科はやはり宗乗と余乗が主で、余乗には<俱舎論^{くしゃ}>と<因明論^{いんみょう}>を用いた。前者は法隆寺などの法相宗の根本教理を説いたものといわれ、後者は仏教の論理学である。そのほか語学として漢文と英語、それに英語で書かれた論理学があった。坊さんの卵たちには職業上一番大切であったろうが、私には何より苦手であったのは^{しょうみょう}声明の時間で、それは一室にみな集って読経することである。また予想もしていなかったが、私の最も興味を持つようになったのは、京都大学の坂口 昂博士が講ぜられた<西洋文明史>であった。ここで私はギリシアにはじまる西洋文化の深遠性や優秀性を身にしみて味わった。

<ヘレニズム>というような語を学んだのもこの時である。図書館でウォルター・ペーターの<ルネサンス>の翻訳を読んで感激したのも当然であろう。

学校は田甫の真中にあり、毎日寄宿舍から長い廊下づたいに教室へ通うだけで、全く孤島のようなもので、人間生活からはますます遠ざかるばかりであった。寄宿舍の部屋は南面し、その北側には廊下を通じ、その硝子窓から北方を見ると、やや西北に愛宕山が聳え、それから東方へと北山の峯々が続き、更に東北方には比叡山が一段と高く仰がれる。この景観はいかにも洛北らしいものであるが、しかし夜になると、それらはすっかり暗黒に閉ざされ侘しい限りであった。ただ西北方の地平にあたって点々と横に長く小さい灯火の連続を認めることができたが、それはよく考えると、紫野の京都女子師範学校の寄宿舍であった。毎日法衣で一種の僧院生活をしている者にとっては思いがけぬ人間味が感ぜられ、余計に侘しさが増すのであった。(この大学の附近は、いまでは、<桑海の変>というか、すっかり市街となっている)。

京都には美術の秋がやって来た。岡崎公園では二科展、院展、文展と次次に美術展覧会が開かれた。私は田舎町に育ったから、こういうものをいままでに見たことがなかったから、大変な驚異と好奇心をそそった。会場では一つ一つの作品に全く魅了されてしまった。有名な老大家は別として、前田青邨、土田麦僊、川端竜子などが特に印象的であった。洋画は以前から想像していたのとそう変わりがなかったが、日本画もこんな自由と新鮮さをもって描くことができるかと全く胸を打たれた。前述のように中学四年生頃から、美術のようないわば世間的な娯楽を蔑視していたが、いまやまた美術に対する興味が勃然と甦って来た。折があれば京都博物館や諸寺院へ通っていろいろの古美術の傑作をも鑑賞するようになった。

その12月に、私は風邪がもとで肋膜炎に罹った。早速帰郷して家で静養することとなった。たいしたことでもなく、翌年の3月頃には次第に快方

へ赴いた。二階の一室で病床についていたが、陽当りのよい硝子戸を風がゆすぶるのを聞いて、母は<もう春風が吹き出した>とあって、いかにも私の病気がよくなるかのように慰めてくれたことを思い出す。私の家は人数も多く、騒がしく、小さい弟妹たちに感染もおそれられ、もっと小人数で静かな所へと、母の実家へ私は移った。

叔父は九州大学の医学部を出て、もう結婚し、インターンでそのまま福岡にとどまり、また叔母も或る裁判官と結婚し、横浜へ行っていたから、祖母と女中と年老いたばあやとだけの物静かな一家であった。私はいつも病床についているわけではなく、二階の一室にいて読書をするか、祖母と長火鉢を囲んで雑談するかであった。この祖母は父方の祖母とたしか同年輩であったが、外貌や性格はまるで正反対で、いかにも武家の女らしく、静かで、またお愛想もいわなかった。晩には仏壇の前でただ念仏を唱えるだけで、お寺詣りもすることなく、余り信仰家ではなかったが、ただ話好きで、私には昔話をいろいろしてくれた。若い頃、御維新を親しく経験して来ているだけ物珍しいことが多かった。天守閣が百両で売りに出されたことなど。またその東北に残っていた一つの櫓は、その当時、祖母の家の所有で、何かの倉庫に貸してあった。祖母は芝居が好きで、町の盛場にある日吉座へそれが掛かるといつも私をつれて見に行った。その頃、天下を風靡した島村抱月、松井須磨子一座の<カチューシャ>を好奇心をもって観劇したこともある。

私はだんだん快復して、外を出歩くことができた。それがまた健康法でもあった。季節も次第に暖くなり、近くの公園の桜も満開したが、また随分遠方までも散歩した。やがて牡丹の花が綺麗に咲き誇った長松寺の境内をわざと通り抜けて、例の本町の上田書房へ時々新刊の書籍を漁りに行った。そこで偶然にヨルゲンゼンの<聖フランシスコ伝>とダンテの<新生>の翻訳を見出した。そのほかにもいろいろなものがあったが、この二書は私の生活に大きな方向転換をもたらすこととなった。神の被造物たる

太陽から小鳥にいたるまでをくわが兄弟姉妹>と呼び、あの崇高なく太陽の歌>をうたい、また小鳥に説教をした聖フランシスコの深遠な自然観は深く私の心を把えて、急に人生そのものまでが明るい、親しみのあるものとなった。またダンテとペアトリチェとの神聖な初恋物語は人生にとっていかに異性が貴重なものであるかを教えてくれた。

或る晩、また祖母とともに日吉座へ観劇に行った。出し物は忘れたが、それが終って、観客はみな^{ます}枒を立てて出口へ向ったとき、そのなかに^ま笹屋の家族の人たちがおり、われわれはお互に挨拶を交わした。その家族のなかに、三人の姉妹がすっかり成人して華やかな姿になられたのを見出した。笹屋というのは、五、六町を距てているが、やはり私の家と同じ町内にあり、以前は呉服屋であったが、いまはしもたやとなり、元来が大地主であった。私の家とは遠縁にも当り、また例の染香講の一員であった。三人のうちの次女をお琴さんといい、私と同年輩で、小学校も同じであったが、男女共学でないから、たまに運動会などで顔を合わせる位であった。笹屋の屋敷にはお稲荷さんがあり、そのお祭りには私の幼い頃、よく呼ばれて行ったこともあった。一つの深い印象は小学校の時、お琴さんと私とは或る地方新聞に模範生徒として二人を並べて写真まで掲げられたことがある。そんなわけで何んとなく子供の時から一種の親近感を抱いていた。ところがいまや異性としてまずはじめに私の心裡に大写しに描き出されるに至ったのはお琴さんである。私は日夜彼女を恋慕、憧憬することとなった。そうかといって恋文を書くとかいう現実的な手段をとるなどは思いも寄らなかった。まして結婚することなど考えてもみられなかった。ただ心のうちに深く彼女を思いつめるばかりであった。その頃、私は感想や印象のようなものを毎日ノートに書き綴っていたが、それらのページはただ彼女に対するやるせない愛慕の情ばかりで充された。多少実践的行動に移ったことといえば、暖い季節だから私は夜もよく散歩したが、その方向はおのずと彼女の家の方へと向い、しかもその表通りは人目につくように考え

七十年の幻影

られ、裏通りへ行きその裏門のあたりをただ徘徊するのであった。私の初恋は結局は夢のようにはかない片恋に終わったが、私にとっては人生行路における一大飛躍であったことは確かである。お琴さんは年頃であり、やがて東京の大森の或る大地主の家へ嫁いだことは聞いたが、割合に早く世を去ったのである。

その夏の初めに叔父夫妻は福岡から帰郷した。この叔父は私とあらゆる点でよく似ているともいわれ、また大変可愛がってくれもした。急に祖母の家は賑かとなり、私もますます健康に復したから、明るい日々が続いた。その頃、私は叔父からドイツ語を習いはじめた。これは兼ねての念願であったが、やっと実現されたわけである。ドイツ語の日課でなかなか忙しくもなった。また叔父はその先輩で名古屋で開業している内科専門の望月博士のところへ診察を受けにつれて行ってくれたりした。それから二三度通り間に私の病気も大丈夫といわれるようになった。

叔父夫妻は7月の終り頃、福岡へ帰ることとなり、また私を保養かたがた同伴した。途中、宮島や岩国へ立寄った。叔父の家は博多にあった。20日間ばかりの滞在中私は太宰府、観世音寺などを見物した。帰郷すると、私の中学校の先輩で、駒場の東大農学部を卒業したばかりの桐山専一氏が丁度よい機会だから東京へ行かないかと誘われた。私としてははじめての東京見物だから大変期待が持てた。宿は大崎にあった、氏の妹さんが片づいている家であった。まず駒場あたりのまだ武蔵野の面影が残っていた田園風景が荒削りで明朗で気にいった。山ノ手線を電車で廻ってもみたが、そんな風景が随所に見られた。殊に戸山ヶ原あたりの自然のままの木立の群などは全く新鮮で開放的であった。京都の郊外が箱庭式の人工と因習とに汚されているのとは総てが対照的である。この滞在中、銀座やまた一度は妹さんにつれられて帝劇を見物したこともあるが、そういう東京の都会美よりは、むしろその周辺の自然美に感心した。

9月にはいると、健康も快復したから、私は大谷大学へ復学することと

なった。はじめはしばらく寄宿舎へ入れられたが、どうしても辛棒し切れず、下宿する許可を得た。西陣の小さな織屋の、下で綴錦を静かに織っている二階の一室を借り、自炊をはじめたが、三、四週間ばかりでとうとう匙を投げた。その頃、偶然の機会に渡辺家の次郎さんに会った。渡辺家は同郷の知合いで、沢山の兄弟があり、その三男は私と中学で同級であった。その兄が次郎さんで、とても親切な方であり、私から窮状を聞くと、すぐ自分の家へ来るようにいわれた。その母堂は未亡人であったが、稀に見る賢夫人で、そのお子さんたちの勉学のためにわざわざ一家をあげて移り、寺町今出川を少し上がって、左へはいった所にそのお宅があった。私は大変喜んで早速その二階に寄寓することとなった。

学校は一年をまた繰返すのだからつまらなかったが、ただ例の坂口博士の西洋文明史はやはり立派なもので、段々時代も進み、近世にはいっていた。殊にルーターの宗教改革などは感激して傾聴した。というのは、日々身边に見聞している坊さんの卯たちは月謝の免除などの恩典に浴し、また将来就職の心配もなく、大抵はただ安易に、惰弱に流れているのを知ることにつけて余りにもかけ離れていたからである。また今年からは清沢満之の薫陶を受けたという金子大栄先生が仏教概論を講ぜられ、それは全くオリジナルなものであった。前の坂口博士の西洋文明史は〈概観世界思潮〉として、また金子先生の講義はそのまま〈仏教概論〉として後年になり岩波書店から出版されたほどだから名講義に違いなからう。その前年か、京都大学から〈哲学研究〉が創刊され、西田幾多郎をはじめ、その一派の新進哲学者の諸論文が次々に発表された。それらを私はとにかく耽読した。西田さんは大谷大学へは上級生に向って講義に来ておられ、〈思索と体験〉を教科書に使われたこともあり、この本には早くから魅力を感じていた。その頃、論理学の木場了本という東大出身の先生から、もと日本画家だったという、在家出身の一人の同級生とともにイエルザレムの〈哲学概論〉の英訳を特別に講読していただいた。先生のお宅は上賀茂にあったから、

夜、賀茂川の松並木の寂しい堤の路をとおって通った。またその頃、阿部次郎先生、安倍能成先生、小宮豊隆先生、茅野蕭々先生、和辻哲郎先生などを同人とする〈思潮〉が岩波書店から創刊された。これは哲学だけというより、一般の思想、文学、芸術に関したもので、毎月それが出るのを心から待たれた魅力ある論文に充ちていた。だいたい後のことであるが、茅野先生の Rilke の詩や〈ロダン論〉の翻訳や、和辻先生の〈古寺巡礼〉などはこの誌上で読み、すっかり心を惹かれたものの一つであった。〈哲学研究〉よりも〈思潮〉の方が私の性格に合っているようにも思われた。

その秋の中頃に、学校から殆んど全学生が泊りがけで奈良へ行き、諸寺や博物館の仏教美術を逐一丹念に見学したことがあった。前から奈良の美術は屢々見ていたが、この時ほど熱心に鑑賞したことはなかった。

その頃、倉田百三の〈出家とその弟子〉が出て、世間は一種の親鸞ブームであった。私は上人については中学生頃から傾倒し、しかもそれがために上人を宗祖と仰ぐ学校へはいったわけであったが、〈歎異抄〉はじめ上人の諸著作を読めば読むほど解らなくなった。ただ念仏して弥陀の浄土へ救われるという他力易行道たりのきぎやうどう（自力難行道に対する浄土真宗の教義）は余りにも虫のよいものにさえ思われた。下京の東本願寺の周辺には多くの会館があって、毎晩のように優秀な先輩の説教がなされた。それを勉強のために学生たちは好んで聴きに行った。その一つにどなたか名前を忘れたが、〈後向きの親鸞上人〉という特に私には深い感銘を与えた説教があった。その要旨は、上人は前向きになってわれわれを導いてくれるのではなく、われわれに背を向けてどんどんと自分だけの道を行かれる。事実、上人は多年南都や比叡山で華嚴や天台などの各宗を学び、ついに法然の他力念仏宗に帰し、しかも恋愛に悩み、結婚もされた。師とともに罪を得て越後に流され、その後は関東の各地を放浪し、数十年の間、波瀾に富んだ人生行路を辿られたのである。そういう上人独自の難行苦行の体験があってはじめて念仏も生きてくるのである、というのである。

仏教は<円熟の宗教>、<老年の宗教>であって、私の浅はかな人生経験ではまだ到底親しめないものと感じられ、次第に西洋の哲学や芸術に興味、関心が移って行ったのは当然であった。従ってこのまま大谷大学にとどまる意義もなくなった。その頃、日本の哲学者で西田幾多郎、紀平正美、鹿子木員信の三氏が最高の方だということを木場、金子両先生などから聞かされていた。それらのうち鹿子木氏は慶応の先生であり、また<思潮>の同人たる阿部、安倍、小宮などの諸先生も慶応に勤められていることがこの誌上でわかり、私はいよいよ慶応へはいろいろと決心した。もう一つは京都のいじけたような自然や人情より東京の荒削りの、さっぱりしたそれらの方が気に入るようになっていた。

*

大正7年(1918)4月、私は塾の文科へ入学した。はじめはエビス・ビール会社の近くの高台にあった素人の家に下宿した。また秋になり小石川の茗荷谷にある郷里の寄宿舎へ移った。予科の専門は哲学科であったが、憧れの鹿子木先生はもはや塾を去られていてがっかりした。しかし御自宅へ訪問したことはある。その時、ドイツ婦人の奥さんは玄関の障子をそとあけ、両手をついて日本流にしとやかにお辞儀をされたのには驚いた。先生の御好意で、女性のファンが多いためか、頌栄女学校で続けていられたプラトーンに関する連続講義を拝聴することを許された。専門の同級生は私と故勝本清一郎君など四人であったが、そのうち二人はいつの間にか姿を消した。大体の学科は一般の文科と変わりがなかったが、ただ余分に数学の、しかも何のことかわからない微積分をやらねばならなかった。そのため勝本君と二人で法科の教室へ行った。そんなわけでまず親しくなった一人は彼であった。彼は塾生え抜きでちゃきちゃきの都会人であり、私はまだろくすっぽ東京弁も話せない田舎者であったが、割合に性も合い、一生を通じてお互に尊敬もしあった親友であった。それから親しくなった

七十年の幻影

のは加藤元彦君や柴田三之助君などである。前者は郷里が名古屋だから、その言葉づかいからおのずと通じあったのであろう。後者は家が銀座二丁目で、時々そこへ遊びに行くようになり、割合に早くから銀座やら一般に下町の雰囲気親しむことになったのは全く彼のお蔭である。

ドイツ語の勉強は私の最大の目的の一つであったから、課外に或るドイツ老婦人についてオットーの文典を習った。彼女は市ヶ谷の陸軍士官学校の下の裏町にある小さな日本家屋に住んでいた。小さな庭のなかに池があり、そこに数十匹の亀を飼っていた。その亀が縁側へ昇って来ることができるよう小さな梯子が立て掛けてあった。だから数匹の亀が座敷のなかをいつもうろついていた。私は時々亀の餌を買いにやらされたことがある。

一年生をおえた春の休みに私は柴田君とともに10日間ばかり京都や奈良の美術見学の旅に出た。その時は私が案内人となった。また帰途、彼は私の郷里の家に泊っていった。

予科二年のドイツ語ではじめて安倍能成先生にヘッベルの〈自叙伝〉を、沢木四方吉先生にシュニッツラーの〈ジェロニモとその盲目の弟〉を習った。お二人の教授振りはそれぞれに異った特色があり、私には面白くもあり、大変役立った。この時の両先生との出会いが私のその後の生活にとり決定的な意義を持つものといつてよいであろう。安倍先生は〈人生の師匠〉。沢木先生は〈学問の師匠〉として。

その頃、論理学を船田三郎先生に学んだが、これまた課外に哲学の本を読んでいただくこととなり、私が世話役となり、一般の学生を募集した。はじめにコントのポジティヴィズムに関する英書を、次にはバートランド・ラッセルの〈哲学の諸問題〉の原書を読んでいた。そんなわけで先生とは個人的に親しくなり、本郷西片町のお宅へも時々あがることとなった。

また安倍先生とも親しくなり、或る初夏の夜はじめて小石川小日向台町

のお宅を訪ねた。郷里の寄宿舍とは近くであったから、屢々うかがった。その夏休みには私は三人の妹とともに養老の父の別荘で過ごした。安倍先生は御旅行の途中にそこへ立寄っていただいた。先生に御昵懇にしていたことは拙稿〈安倍能成先生と私〉に詳しく述べた。

当時、塾の文科で文芸同人雑誌を出すことがはやりだした。われわれのクラスでも、フランス語の武山君とドイツ語の加藤君がリーダーとなった。〈プレリュード〉という題がきまり、とにかく雑誌は出た。何号続いたか忘れたが、その後〈群像〉と改名して、また出された。ほかの諸君はなかなか立派な作品を発表したが、私はいずれの号かにヘッベルの〈自叙伝〉の翻訳（未完）を出してもらった。これが私の最初のドイツ語の翻訳である。

加藤君とその友人の駒場の東大農科の学生江尻君とともに私は加藤君の或る知人の家族と共同生活をする事となった。その家は渋谷のいま東急本社のあるあたりで、その頃はそこら一面に自然のままの小さな高台が起伏し、それを切り開いてぼつぼつ家が建ちはじめていた。その一軒を借りたのだが、見晴らしもよく、近くの道玄坂など昔の街道の面影が残り、山ノ手線へ乗るには踏切りがあり、駅の建物も田舎のそれと変わりがなかった。

私はその頃、油絵をかくことに興味を持ちはじめ、その道具一切を買いこみ、近くの郊外へ出て、田園風景を写生した。弁当持ちで歩いて二子多摩川までも行った。また芝浦の埋立地へもよく出かけた。その頃、そこは一面に雑草が生え、所々に小さな工場があり、北方を望むと東京のどんより曇った空が特有な魅力に富み、とにかく郊外とは異なった近代的ないろいろのモチーフが見出された。

もちろん私は西洋美術に対し熾烈な関心を持ちはじめた。まずバルビゾン派の田園画家ミレー、デッサンの面白いレムブラントなどに心を惹かれた。彼らの英語の伝記を丸善で求めてむさぼり読んだ。次には全くゴッホ

に傾倒するに至った。その手紙の独訳なども求めた。日本の油絵では文展の老大家より二科会の方が面白かった。しかし最も感心したのは、赤坂の三会堂で開かれた草土社展の作家たちであった。その首領岸田劉生がなんといっても第一番に挙げらるべき人であった。

私はいよいよ本科に進んだが、その時、美学美術史学科が創設され、当然そこへ行くべきであったが、私には簡単にそれができなかった。そのためには私なりの理由があった。第一に、美術或るいは美の本質は自身で創作してみればじめてわかるもので、ただ鑑賞したり、研究したりするだけでは十分に把握することができないものと考えられ、美術史の研究の意義がその時の私にはまだはっきりしていなかった。第二に、私は田舎出身で、下宿して月々僅かの仕送りを受けている身分であるが、美術史をやるには金がかかることは明かで、その時、美術史に進んだ勝本、柴田、渋井清の諸君にしてもみな立派な家が東京にあり、資産家ばかりである。例えば沢木先生を囲んで会食するにしても、その頃、銀座にあった第一流のレストラン〈エイ・ワン〉でやるようであり、到底私には思いもよらぬことであった。私はもちろん沢木先生を聴講だけでもしたかったが、生憎、私の専門の認識論の必修の授業とかち合ったりして、それも十分に果たされなかった。とにかく私は立派な作品を製作する意慾に燃えるばかりであった。その頃、加藤君たちとの合宿が解散して、私だけその主人の家族とともに原宿へ移った。丁度、明治神宮が造営されつつあり、その青山からの参道も工事中であったが、その近くに下宿はあった。

私がゴッホに熱中していたことは前に一寸触れたが、いよいよ絵をかくことが自分の一つの使命のようにさえ思われ、それとともに学校の授業がつまらなくなった。その悩みを安倍先生に訴えたら、そういう時には〈自然に還る〉ことが何よりだとたしなめられた。ついに私は6月から郷里へ帰ることにした。私の家は町なかだから、そこで思いついたのが例の渡辺家である。この家の母堂は前より熱心な天理教信者であり、その子弟たち

も殆んど信者となられ、いまでは郷里の屋敷へ一家をあげて帰えられ、ほかの数家族の同信者たちとともに、天理教を中心とする一種の理想村を営み、それを〈愛の村〉と称していた。こういう消息を次郎さんから伝えられていたから、私は早速そこに泊めていただく許可を得た。そこは私の郷里大垣から西北二里位のところに池田山が聳え、その山麓の宮地村というところである。天理教は陽気な宗教であるから、夜になると信者たちが屋敷の中央に新築された会堂へ集まって、歌ったり、踊ったりした。次郎さんはじめみな信者はお互に〈善意の塊〉のような方ばかりであった。この時またはじめて私は農村生活におけるいろいろの珍しい行事なども味わった。私は別にすることもなく、村娘やお婆さんなどを油絵でかいた。ただ朝から晩まで集団生活で、自分だけの時間が持てないのが不満になって来た。

或る日、池田山麓を北方へ十町ばかり行くと草深い山懐に瑞巖寺という禅寺があることを見出した。私はそこの和尚に会って一部屋を借りることができた。この寺は堂宇もなかなか立派で、或る旧華族の菩提寺ということであった。私の部屋は本堂のなかの一室で、昼間もなお寂しい所であった。がらんとした庫裡には和尚のほか二人の小学校へ通う小僧と飯焚婆さんがいた。私はみなと同じ食事を喰べた。それこそ一汁一菜を通り越して粗末なものであった。和尚はただ酒が好きで、毎晩それをたしなみ、よい気持になった。私も時には一升徳利をさげて、近くを流れる、山狭から出たばかりの春日川（揖斐川の一つの支流）の清流の一木橋を渡って村の酒屋へ買いに行った。いつもは和尚は典型的な禅坊主で、小僧の躰などは極めて厳格であった。

その頃私はドイツ画家デュラーに非常な興味を持ちはじめていた。銀座の柴田君から、前に頼んでおいたらしく、この画家の特にデッサンと版画を集めた素晴らしい画集を丸善で求めて送って来た。私は大変喜んで忙しい山寺の生活もぱっと一時に花が咲いたように明るくなった。元来私は

デッサンが好きで、また得意でもあった。デューラーのデッサンには陶然として酔わされた。毎日のように、門前にある四、五軒の小さな百姓家の小娘たちが寺の縁側へ遊びに来た。次第に私と親しくなり、彼女たちを順順にコンテで素描した。またその頃、私はレクラム版のスピノーザの〈エチカ〉を岩波文庫のその邦訳と首引きで読みおわって、哲学的思索というものの本質に触れたような気がした。

私がこうして哲学と芸術との二筋道を歩いていることは人生行路としてはなほだ不得策と思われ、また私自身としてもいつもそれがために煩悶を重ねるばかりであったが、しかもそれには一つの深い理由が考えられる。私は前にペーターの〈ルネサンス〉を読んで強い感銘を受けたことを述べたが、その書の一章たる〈ヴィンケルマン〉のなかで見出し、また後年になり彼の原書、即ち〈絵画並びに彫刻に於ける希臘作品の模倣に就いての思考〉を私が邦訳することとなった一語句に次のようなものがある。〈希臘には同一人にして芸術家たると共に哲学者たりしものが多い。それは独りメトロドール（二世紀のアテネの人。画家にして哲学者）のみに止まらない。哲学は芸術にその手を貸し、芸術の諸像に超俗の精神を吹き込んだのである〉（〈川合教授還暦記念論文集〉二七四頁）このような理想はあまりにも高遠で、われわれ凡人には到底達成されないことであろうが、しかし一つの生活信条として守ることは許され、またこのことは現在に及んでもそれに変わりがないであろう。

私はこの禅寺のことなどを詳しく述べ過ぎた感がある。それにはわけがある。いま京都天竜寺の管長として有名な関 牧翁師は、人も知る如く、塾の医学部の中退であるが、その若い時、失恋か何かの事情で人生を煩悶し学校も止め、家も出て、上野公園あたりを浮浪していたが、偶々腰掛けたベンチの上に〈キング〉という当時の有名な大衆雑誌が読み棄ててあったのを手にして、そのなかで例の〈愛の村〉に関する記事を読み、自分が救われるのはそこにあると思い、その足で渡辺家の〈愛の村〉へやって来

て、身を投じた、そこに2、3年いた後に、天理教では物足りなくなったのか、とうとうその奥にある瑞巖寺へ行った。私がそこに滞在していた数年後のことである。牧翁師は真面目に禅宗を勉強するようになり、和尚から見込まれ、得度も受け、坊さんになり、しかもその後継として選ばれた。またそのために京都妙心寺の花園大学へ行き、本格的に禅宗を勉強することとなった。そこでまた出色の才能を発揮し、天竜寺の前管長関 清拙師に見込まれ、自分の後を継ぐべき人はほかにないというわけで、四十代の若さでついに牧翁師は管長となったのである。この事情は私が渡辺家の次郎さんから親しく聞いた所である。

9月にはいり私は田舎生活にも満足して、また学校へもどることとなった。その頃、上智大学へ通っていた弟が本郷の下宿屋にいたから、そこで私も同宿することとなり、また学校へも出るようになった。

私は田舎でかいた作品を若干持って来ていたから、それをどなたかに批評してもらいたいと思った。まず念頭に浮んだのは岸田劉生先生である。私は先生あてに無作法にも紹介状もなしに手紙を書いた。早速に返事が来て、先生の鶴沼の画室を訪ねることが許されたのは大変な悦びであった。はじめてお訪ねした時には武者小路さん夫妻も来遊されていた。それから折々鶴沼を訪ねた。丁度、お嬢さんの〈麗子像〉を盛んにかいていられた頃で、私はその製作過程を一日中傍にいて拝見していたこともある。先生のヴァン・エイク張りの細密な写実に私も心を惹かれ、私もその流儀で〈自画像〉をかいたりした。実は郷里の宮地村にいた頃、次郎さんのお勧めと彼の調髪とで私は頭髪を伸ばし始めすっかり長くなっていた。また祖父が用いたという古風な、へりの広い黒い中折帽子を土蔵から捜して来てかぶっていたから、いよいよ画家らしい気持にもなった。

学校ではドイツ語の授業には努めて出た。茅野先生のニーチェの〈ツァラトゥストラ〉その他数々、小宮先生のゲーテの〈イフィゲニエ〉その他、川合貞一先生のシュヴェグラーの〈哲学史〉、伊藤吉之助先生のカントの

〈純粹理性批判〉など、私の必修の諸講義を聴いたことはもちろんであったが、そのなかで心理学というものにどうしても興味が持てなかった。そのわけは、その頃一般の哲学界では新カント学派の全盛で、何んでもカントであった。従っていわゆる論理主義が奉ぜられ、心理主義が軽んぜられていたがためばかりではない。納得のゆく心理学の講義が聴けなかったからでもある。その頃、むつかしいといわれたジムメルの〈カントとゲーテ〉を自分で読みこなすことができ、大変嬉しかった。またヴィンデルバントの〈プレルーディエン〉二巻における興味深き諸論文を読み、それによって茅野先生へのレポートを書き、ほめられたことがある。沢木先生がヴェルフリンの〈古典美術〉の英訳を使っていたら、それが聞けないのを残念に思ったことがある。いまから思うと、感慨深きものがある。また私はロマン・ローランの〈ミケランジェロ〉の独訳を読み、すっかり魅せられた。時々、銀座の柴田君の家へゆき、それを講読してやったこともある。

講義のうちで、阿部次郎先生のダンテ研究は感激して傾聴した。これは後に〈地獄の征服〉という標題で出版された。ただ先生をお自宅へ訪ねる気持にはなれなかった。和辻先生のギリシア文化に関する講義もあったが、お書きになったものとうって代って全く生彩がなかった。因みに安倍能成先生はすでに塾を去られ、法政大学の文学部長かになられ、講義を聴くことはできなかったが、屢々お宅にはうかがい、学問や芸術のほか人生のことについていろいろとお話を聞いたことはいうまでもない。

故新館正国君との交遊は本科になってはじまった。予科のときは、昼食の休み時間など、彼は三田の山の下で一パイやって来たらしく、教室へ帰ると腰掛に仰臥して端唄の一節を口ずさんでいるのを見たこともあり、私ども無粋者とはまるで別なグループに属していた。本科になると彼は社会学であり、私と同じ哲学科に属していたから、教室で顔を合わすことが多かった。彼は論客であるから、会えば必ず議論となった。それがいつまでも続き、芝公園を通り抜け、とうとう銀座まで歩いて行ったことも数度に

及んだ。

その頃はラジオやテレビもなく、講演会が都下の諸所で開かれ、著名な学者、思想家、作家などの各種の生なまの声を聞くことができた。吉野作造のデモクラシー、左右田喜一郎の価値哲学、桑木巖翼の啓蒙的な哲学論はじめ、塾の大ホールではアインシュタイン自身の相対性理論（石原 純の通訳）、西田天香の一灯園の話、高畠素之のマルキシズムなどなど。これらは殆んど新館と一緒に聞いた。私の本郷の下宿屋へは加藤君もやって来た。また彼の同郷の友人で塾の経済学部部の久野豊彦君も近くの下宿にいた。われわれはみな文学が好きでよく一緒に話し合った。本郷の通りには古本屋が軒を並べ、夕食後の散歩がてらにそれらを一巡するのが楽しみの一つでもあった。その当時、私にはカントとゲーテが最高の崇敬の的であった。或る春の休みには私は帰郷もせず〈ウィルヘルム・マイスター〉の翻訳を耽読したこともある。また〈本郷美術研究所〉というのが三丁目の近くにあり、とうとう私はそこへ入学して、ヌードをデッサンするのに興味を覚え、時々、三田まで行かずにいたこともある。また四日市出身で東大の法科へ通っていた熊沢孝平君が目白の女子大へ通っていた妹さんや一人の親戚の方とともにやはり近くに一家を持っていた。熊沢君は兄さんが塾の学生であったから知合いとなり、君もまた文学好きであったから、とうとう加藤、久野、熊沢の諸君と女子大生二人と私とで同人雑誌を作ることとなり。はじめは回覧誌としてただ原稿をとじただけのものであった。それが後になり〈葡萄園〉として刊行されることとなった。

私も卒業が近づき、卒業論文を書かねばならない。いろいろと考えあぐんだあげく〈カントの美学〉に決めた。大西克礼先生の美学概論は学校で聴いていたから、哲学のうちではやはり一番親しみが持てた。ただ丁度その頃、ヴェルフリンの〈デューラーの芸術〉を読み出し興味を覚え、できれば美術史をやっておけばよかったなどと後悔したこともあった。卒業の前年の夏休みに帰郷し、8月の末頃偶然に隣りの三輪君に会い、自分は文

官試験を受ける準備のために、いままで鎌倉の円覚寺で勉強していた、といわれ、それはよいことだと私も早速彼の紹介状を持って鎌倉へ行くこととなった。円覚寺の塔頭の一つ続灯庵がその紹介先であった。その途中の汽車のなかで勝本君に会い、卒論のために京都で必要な美術品を見学して来た帰りだといわれ私はまだこれからというわけだから、全くがっかりした。私の卒論には日本語の参考書は一つもなく、みなドイツ語ばかりである。尤もそういう難関は自分の故意に選んだことだから仕方がなかった。続灯庵の本堂の奥の一室があてがわれ、食事は円覚寺門前の柳屋へ通った。この塔頭は円覚寺境内でも奥の方にあり、その庭の崖下に僧堂や舍利殿などがあつた。禅寺は閑静で清浄で身も引き締まるように感じた。そこから時々大船駅まで歩き、汽車で東京へ通った。卒論がなかなかはかどらず、ついほかの本を手にした。アナトール・フランスの〈赤い百合〉の翻訳などもその一つ。また鷗外訳を手引きとしてゲーテの〈ファウスト〉の第一部を耽読したのもその時である。しかし、とにかく卒論を書きおえて、川合貞一先生へ提出した。ところが私は大正12年（1923）の3月には塾を卒業することが許されなかった。それは心理学の採点がなかったからである。そのわけは、その試験の時間をすっかり間違えていた。私はその時、軽い中耳炎のため頭に大きく繃帯をしていて、耳が遠く。注意が行き届かなかったためであろう。このようなわけで私は卒業式にも出席せず、やっと5月になって卒業ができた。

*

さて卒業したものの何もすることがなく、川合先生に大学院へ残り美学を勉強したいと申し出たが、塾にはその専門の教授がないというような理由で却下された。その初夏に郷里で徴兵検査を受けたが、前にわずらった肋膜炎の痕跡のためか、乙種であった。また続灯庵におちつき、好きな本を読んだり、絵をかいたりしていた。安倍先生は絶えず私に好意を示さ

れ、また時々遊びに来られた。しまいには私の部屋がお気に入り、自分に貸すようにいわれ、私はその隣室へ移った。先生は土曜から日曜にかけ泊まりがけで来られ、数十冊の書籍も運ばれ、お仕事もされた。私は何か職に就きたいと思い、先生に相談したら、建長寺の境内にある鎌倉中学校の主事が知人だからといわれ、そこへ紹介していただいた。私はその主事に会い、来る9月から英語の教師にさせていただくこととなった。その頃いま有名となった円覚寺管長朝比奈宗源師はまだ壮年で、浄智寺の住職であった。私は彼を〈源さん〉と呼んで親しくしていた。

その9月1日にあの関東大地震があって、鎌倉は相当にひどかった。古い建物であったから、続灯庵は一瞬にして倒壊した。とっさに私は庭先へ飛び出した。丁度、昼食直前であったから、台所には火があり、それがもとでついに堂宇は焼失した。私は浴衣一枚で命拾いだけをした。円覚寺はただ山門を残して、舍利殿、法堂、大方丈などは全部倒壊した。その晩は浄智寺の藪のなかへ避難した。東京もひどいことを聞き、郷里へ帰ることに決めた。翌日、やはり寺に同宿していて文官試験の勉強をしていた某君は郷里が岡山とかで道ずれもでき、〈源さん〉から三円を借り、また興津清見寺への紹介状ももらい、徒歩でいよいよ出発した。その夜は大磯の近くの西瓜畑のなかで野宿した。箱根の山越えにかかった時は、雨が降り出し、まず番傘を買い、また寒さを覚えたからウイスキーの小壺を求めた。三島へ辿りついた時には別世界のようでほっとした。清見寺で一泊の上、汽車に乗り、やっと私は夜おそく帰郷した。当然私は遭難しているものと思いきまれているだけに、父はじめ家人の驚きと喜びは大変なものであった。

私はそのまま郷里にとどまり、また母の実家に寄寓していた。その時、前から好きであったウォルター・ペーターのイマジナリー・ポートレート〈想像上の諸肖像〉という、フランス画家ワトーなどのことを取扱った小説を戯れに翻訳したりした。その11月6日に、余り長く病床につくことなく父は心臓病のため五十一歳

七十年の幻影

の若さで亡くなった。父とは私は兄弟のうちでもよく話があい、いわば一番の寵児であったから、その悲しみは心の底までしみとおった。父の集めた沢山の書画骨董の蔵品を一つ一つ道具蔵から取り出して、その目録を作ってみたが、それがせめてもの追慕となった。その時、赤絵や染付などの中国陶磁の鉢や皿その他が改めて私の非常な関心を惹くこととなり、またその芸術的意義が解かるようにもなっただけでなくうれしくもあった。またいつまでもぶらぶらしているわけにもゆかず、そうかといって郷里には就職など思いもよらず、上京して何か道を拓くよりほかなかった。

話は<葡萄園>のことにもどるが、いままでの回覧誌では満足することができず、ついに印刷して世間へ公表することとなった。第一次の同人は加藤、久野、熊沢と私との四人であった。その創刊号が出たのは9月のことで、震災後の混乱期とかさなり、売行きや反響がどうであったかはまるで不明であった。しかしわれわれはそれにもめげず、毎号同人たちは短篇小説を書いた。その頃、久保田万太郎先生は、われわれを評して<どこの馬の骨やら>といわれたと、久野君は大変憤激していたことがある。それはとにかく当時<三田文学>を勝本君が編集していたから、私は同誌に寄稿するように随分勧められたが、それがどうしてもできなかった。そのわけは私には一種の野党的な反骨精神のようなものがあつたからでもあろう。このことはずっと私の現在までも続いているかも知れない。その頃、われわれは長田秀雄先生から大いに激励を受けたことを感謝している。まず久野君があつた独特な文体と構想をもって文壇に認められ、新進作家として活躍することとなった。私はその第4年目頃まで関係したが、その後新しい同人、例えば故詩人蔵原伸二郎、故吉行エイスケ、十和田操などの諸君が続々と参加し、5、6年は続き、芥川賞をもらった小田嶽夫君の如きも、またその一人である。

大正13年の5月、私は郷里の或る新聞社主催の団体に加わって、弟とともに中国の上海へ一週間ばかり旅行した。実は亡父は例の文人趣味からと

ても中国の文物が好きであったから、自分で親しく一度は中国へ行きたがっていたらしいが、せめて私が代りに行って見てくるようにと、前から私には秘してその旅行団へ申し込んでいたのである。上海から西湖までゆき、その純中国風な景観には全く心を惹かれた。上海からの帰途に長崎へ寄港したが、私だけそこに2、3日滞在した。これまたキリシタン文化の名残りやらで改めて異国情緒の濃やかさに眼を見張った。このとき図書館に勤められていた三田派の増田廉吉氏にいろいろとお世話になった。

その6月に上京して、安倍先生にお会いすると、子規の門人であった寒川鼠骨が、或る引退していた実業家から、学問の好きな若い人を秘書に雇いたいが、誰かないかといって来たといわれたから、私は職にもありつけず、父も亡くして困っていたところだから、早速にそれを引受けた。一つには就職先の場所に興味を持ったからでもある。その場所は富士山麓の不二農園であり、その実業家は岩下清周氏といって、明治大正時代には関西の財界をリードした人であるが、或る贈賄事件で失脚し、ついに世間から引退して晩年をこの農園で悠々自適の生活を送るようになったのである。氏の令息は、その当時はヨーロッパに留学中であったが、後に有名となった岩下壮一神父である。また氏は若い時は三井に勤め、ながらくパリにも滞在し、すっかり西欧的な教養を身につけ、しかも明治人としての気骨を持っていた一傑物であった。私の仕事は氏が自叙伝を口授するのを筆記することと、手紙の代筆をする位であったが、前者の仕事は余り捗らず、ただ氏の夫妻や来客と山海の珍味の食事を一緒にすること、また晴れた午後に、その広大な農園（一山全体の茶畑が主で、使用人は二百家族はあり、それがため特別の小学校が設けられていた）を氏のお伴をして散歩することが日課であった。来客は殆んど毎日絶えず、著名な政治家や財界人が多かった。そのなかには益田 孝男爵などもあった。小林一三氏は私の滞在中には来られなかったが、実は岩下氏の弟子分にあたっていた。氏の家族や親戚には、非常な篤信で、壮一神父の影響か、カトリックの熱心

七十年の幻影

な信者が多く、私もカトリックの雰囲気の幾分にもはじめて触れることができた。私の部屋は温室などのある特別の農園の一隅に建てられた園丁の小屋にあった。その頃はドイツ浪漫派のものに関心を抱いて、その種のものを読んでいた。また兼ねてから私をいろいろと配慮していただいた船田先生が二年のドイツ留学からお帰りになり、この本が君には一番ふさわしいとって与えられたのがミュラー・フライエンフェルスのかく人格と世界観であり、一種の芸術の類型学的世界観説であった。これを翻訳をしたらとのお話でもあった。それ故、熱心に読んでみたが、どうも満足が得られなかった。この農園は環境もよく、贅沢な日常であったが、どうも若い者には余り刺戟がなさ過ぎ、大体6箇月位いて暇をとり、また上京してしまった。

安倍先生は丁度ヨーロッパに留学されることとなった。そのお別れの時、もし君が困まることがあったら、岩波茂雄のところへゆけといわれた。私は何か職を得ようと、岩波氏を訪ねた。氏は即座に書店の編集部へはいるようにいわれ、机もあてがえられた。しかし私はその無味乾燥な周囲に到底耐えられなかったから、一日だけ勤めて、自宅でできる仕事に換えてもらった。その頃、岩波書店ではくカント著作集の出版が進行中であった。諸大家が分担してそれぞれの著作の翻訳に当たられたが、その主要なターミノロジーの訳語に統一をつける必要があり、前に出ていたく実践理性批判の訳書とその原書とを対照して、その主要な原語と訳語との一覧表を作る難事業が私に与えられた。

*

大正14年(1925)4月から私は塾の予科教員に採用され、まずドイツ語を担当した。その時、川合先生はいろいろと訓示を与えられた。というわけは、私より一年先輩のドイツ文学を専攻した秀才の某君がドイツ語を教えていたが、その教え方に間違いがあり、それがために学校をやめさせら

れたというようなこともあり、私は授業がいつも試験のようにびくびくものであった。

その夏休みはまた円覚寺が懐しく、その塔頭帰源院で過ごした。その和尚はまだ独身で、雲水の時には夏目漱石に可愛がられたという富沢珪堂師であった。彼は和歌を作り、なかなかの風雅の士で、私と二人で毎日を楽しく送った、一日、普通部の生徒が訪ねて来た。四谷見附の平山堂の息子齋藤貞一君で、大学では美術史をやり、またわれわれの学科のためにいろいろと力を尽してくれ、いまいけば東京の骨董界を牛耳っていることであろうが、戦争の犠牲となり、誠に遺憾である。

その頃からであろうか、旧大名達の美術の蔵品が次第に世間へ売りに出され、その下見が宇田川の美術倶楽部で催された。そのための豪華な売立目録が作られ、またそれらがいつも平山堂から私に寄贈されて来た。それで私は好んで売立の見物に行った。すると齋藤君の父利助氏が私を案内して、一つ一つの作品について骨董商としての特殊な立場からいろいろと説明して下さった。これは博物館におけるとはまた別な意味があって、私には非常に役立った。

大正15年（昭和1年）の春であったか、橋本 孝先生から、自分は鎌倉の沢木先生を訪ね、君がドイツ語の教師になったことを伝えたら、是非一度遊びに来るようにと、ことづてがあったから、すぐ行くようにといわれた。私は早速、扇ヶ谷の先生のお宅を訪ねた。前からお宅の前を通ったこともあり、お訪ねしようと思ったこともあるが、何分専門として先生に習ったこともないから、つい御遠慮していた。最初の訪問のとき、先生は私の将来の希望を問われた。実は私は、＜葡萄園＞に書いた随筆風の小説＜横浜の散歩＞を、木下杢太郎先生にほめられたせいもあり、沢木先生へも贈っていた。それをお読みになったからであろうか、君は作家になる積りか、学者になる積りか、この二つを両立させることは困難だから、どちらか一つを選ばねばならないとも、いわれた。私自身この問題に悩んでい

たところだから、ますます真剣に考えることとなった。小説を書くことはまず豊富な人生経験が必要だし、一方では道楽でもして自由奔放な空想に耽ることを必要とするから、ますます読書の生活からは離れてゆくものと思われて来た。私はやはり一介の書齋人に過ぎない。またそれが一番ふさわしい。沢木先生は時々遊びに来るようにいわれたから、私は時間の許すかぎり、10日に一度位はお訪ねした。お話は学問、芸術などいろいろな方面にわたった。私はいよいよ学問で身を立てることに決心していた。しかも日本美術を専攻しようと思っていた。どうして西洋美術でないかといえ、それをやるには第一条件として、西洋で実物を見てこなければならぬ。もし亡父がまだ生きていれば、その位の費用は出してくれるであろうと残念にも思われた。私はそんなことを率直に沢木先生に訴えた。また事実学校では田中豊蔵先生の講義を改めて拝聴していた。そして春や夏の休暇にはながらく京都に滞在し、古美術の見学に耽った。或る夏は醍醐寺の塔頭光台院に滞在して莫大な数の密教図像を丹念に拝観した。東洋画の線描に非常な魅力を感じたからである。

ところが沢木先生は、日本美術もよいだろうが、実は塾で自分の後継者がいないから、是非君がやってくれ、またいずれは西洋留学の機会も与えられるであろうと、懇願された。私はどうしてもそれを引受けざるを得なかった。

またこの年の10月橋本先生はドイツへ留学されたから、その後を受けついで、予科の哲学概論をも担当し、はじめは英語の本を使用した。

昭和2年10月に、私は二十九才で十九才の渡辺春子と結婚した。彼女は元海軍軍医大佐で開業医をしていた父開吉とその妻とめとの次女である。尤もそれ以前に私は二人のガール・フレンドがあったことを告白する。一人は私が卒業する頃で、彼女は或る女子大を出て、極めて賢明であり、また教養も高かったが、その内実に外形が伴わなかったから結婚にまで実ることができなかった。他の一人は私が教師になる頃で、彼女はまた或る音

楽学校へ通っていた学生であったが、その外形に内実が伴わなかったから、これまた失敗に終わった。親戚の者たちは大変に心配してくれ、とうとう媒酌結婚ということになった。結婚することとなった妻は外形も内実も普通であるが、ただこの両者のバランスがとれているためにこういう結実になったのであろう。従って私にはふさわしい平凡な妻である。

私たちは結婚して青山北町一丁目の電車通りから奥まった所に、妻がつれて来たやや年増の女中とともに家を持った。火鉢を囲んで二人ではじめて口をきいた時に、私は妻に一番何を望んでいるか、とたずねた。妻は、私は信者になりたい、と答えた。実は妻は四谷の雙葉女学校の出身で、在学中からカトリックの教理を聴き、すっかり信服していたが、ただその両親の許可を得ることができず内心で苦しんでいたのである。私は前述したように、裾野の岩下家に寄寓していて、カトリックの何ものであるかについては幾分触れていた。また妻は岩下神父の説教を聴いたりして、大変崇敬の念を抱いていた。このようなわけで私は妻に信者になることをむしろ勧めた。翌日から妻はまた四谷の学校へ通って改めて教理を勉強し、翌年の2月、雙葉の教会堂で洗礼を受けた。

私の鎌倉通いはまだまだ続いた。その頃、芥川龍之介と佐藤春夫との優劣論のようなことを沢木先生と交わしたことが思い出される。しかし主要な話題の一つは日本美術をドイツ語で発表して、いわば世界的に宣揚するということであった。和辻さんの〈古寺巡礼〉は私の本を先生にお貸しした。先生はお読みになり、いま日本美術に関する本でドイツ語に訳す価値があるのはこの位のものか、ともいわれた。また東洋の絵画において独自の意義があるのはいうまでもなく線、殊に肥瘦抑揚のある線であるが、それに該当するドイツ語がないから、東洋の線は *Gefühlsträger* (感情荷担者) とでもいうべき特別の意義を附せねばならない、ともいわれた。その頃、第八高等学校の鼓 常良教授がドイツ語で〈日本の芸術〉という本を著わされたが、それに私は大いに刺激を受けていた。

七十年の幻影

また当時、岩波書店から〈美術叢書〉という、西洋美術に関する独仏の名著の翻訳のシリーズが計画されて、その二、三冊はすでに出版されていた。沢木先生はみずからヴェルフリンの〈美術史の基礎概念〉を担当され、また私にはヴォーリンガーの〈抽象と感情移入〉をやるようにお勧めになった。私はヴォーリンガーをよく読み、また一応翻訳をおえたが、どうも内容に不満な点が多く、出版を見合わせた。しかしこの書に基づいて〈抽象の美〉という論文を書き、〈哲学〉誌上で発表した。またこの論文が〈岩波哲学小辞典〉の編集者の目にとまり、その項目の一部を担当するように頼まれた。

私の家では妻が妊娠したことがわかり、その実家では近くへ移ってくるようにとのことで、昭和3年の春、大井滝王子へ引越した。その秋には長女が生まれたが、二日の後にははかなくも早世した。またこの年の4月から沢木先生の御推薦で私は文学部の講師となり美学演習を担当することとなった。

沢木先生の御病気は次第に悪化した。お訪ねした時は、御病床の近くでお話をした。私は家庭を持つようになってから幾分の心のゆとりを得てか、画仙紙に水墨画のようなものを試みることとなった。油絵は殆んど顧みなくなったが、その理由は、元来私は書道を東洋最高の芸術と考え、油絵ではそれを生かすことができないからである。だから私の作品ではいつも画讃が主要な位置を占めることとなった。先生をお慰めするためと、御批判を仰ぐために、拙作の数枚を御病床にて御覧にいったことがある。紫苑の一本をかいた半折があったが、絵というものはもっと上方をあけて、天地をつけねばならないと御批評をいただいたりした。しかし、〈君は絵がかけて幸福だ〉ともおっしゃった。上述のヴェルフリンの翻訳であるが、自分は到底完成することができないから君がやるようにとも申された。それにしても過分な重責である。とにかく私はこの大著を改めてぼつぼつと勉強しはじめた。

私はその頃、三田哲学会の幹事の一人をやらされ、いろいろと下働きをしたが、私の担当は毎月の例会として研究発表会を、また秋期に一回の公開講演会を開くことであって、そのための発表者や講師を接待したり、司会したりする仕事である。毎月の例会は厳格に行われて、公開講演会とともにそれらの各種の演題や先生方の風貌が懐しく思い出される。

昭和5年8月、長男陽一が誕生して、私の家庭もにぎやかになった。その年の11月に四十五才のお若さで沢木先生はついに永眠された。御葬式の後にはまず提議されたのは御遺稿の出版のことである。そのためにまた屢々私は未亡人をお訪ねして御相談を受けた。先輩にはいろいろの書店を紹介された方もあったが、私はどうしても岩波書店で出すべきと思い、そのために安倍能成先生と小泉信三先生へお願いした。幸に書店の快諾を得たが、遺稿の内容をどうすべきかが問題となった。安倍先生の御助言もあり、児島喜久雄先生にはかることになり、私はその御任地たる仙台まで出向いたこともある。御遺稿のうちで一番取扱いのむづかしいのは塾と東大でなされた〈ギリシア美術史講義案〉であり、これは常に机の引出しに収め、朱筆を加えられ、ゆくゆくは学位論文として京都大学の浜田博士へ提出したい御意向であったことは、先生御自身からうかがった所である。その講義案には英独仏の原書からの引用文がそのままになっていた。これらを翻訳すべきかどうかはまた一問題となった。結局、小泉先生の御意見でそのまま全部載せることとなった。しかしその引用文を原書に当て校訂しなければならない。このことは私にとって全く大変な仕事であった。御遺稿は〈西洋美術史研究、ギリシアの部〉、〈西洋美術史研究、ルネサンスの部〉の上下二巻として岩波書店より昭和7年にはすっかり完結出版された。

その頃、戸川先生のお招きにより喜多流のお能を拝見して非常に興味を持つこととなった。しかしお能を観るためには謡曲を習わねばならぬことを知り、塾の先生のなかにも同好の士がおり、その数名が毎週一回、大岡山の英語の故佐藤先生のお宅へ集まり、喜多流の福岡周斎という師範につ

いて習い、それが5年位続いた。

やはりその頃、戸川先生を中心にして<秋骨会>という、都下の諸所の料亭を遊び歩く仲間があった。その計画者は故奥野信太郎君で、彼の芸能の蘊蓄はその機会に大抵拝見した。

昭和9年には私はパッサルゲ著<現代美術史理論>の翻訳を春秋社より刊行した。この年に予科は日吉へ移り、そのために、私は三田と日吉との両方へ通うこととなった。予科長小林澄兄先生は教育上いろいろの新機軸を出されたことはもちろんであるが、そのほか先生たちの間で野球熱も盛んで、他学部の先生のチームと時々いろいろなグラウンドで試合をしたのが懐しく思い出される。

美学美術史学専攻の学生はその頃、年に二、三名、或るいはただ一名、一名もないというようなこともあった。これは或る程度文学部全体についてもいえる共通の現象であった。現在の状態と比べると全く隔世の感が深い。しかし沢木先生によって創立された<三田芸術学会>の仕事と伝統は受け継がれ、殆んど毎月会合して、会員或るいは外部の方の研究発表や、美術見学を行った。そのためには渋井君やその他の先輩の援助を受けたことが多大である。

沢木先生亡きあと、どうなるかと思われたヴェルフリンの<美術史の基礎概念>の拙訳は昭和11年6月に岩波書店から刊行された。長年の努力の結晶であるだけに私の悦びは大変なものであった。尤もこの翻訳のためには安倍先生はじめ、茅野先生、児島先生などには非常な御支援を仰ぐことができて幸であった。殊に翻訳の個々の問題に関し、数年間は殆んど毎週一回、茅野先生のお宅へあがって懇篤な御教示をいただいた。幾分専門的すぎ、また難解な本であるから、はじめは書店も売行きを危ぶんだようであったが、これまた幸にいまでは第十版を重ねるにいたっている。

またこの年の3月に長女千重子が誕生してますますにぎやかな家族となった。

昭和12年5月には私は文学部助教授になった。それから、板垣鷹穂講師のあとを受けて西洋美術史概説を担当した。

一般の社会情勢は年毎に陰悪さを増して来たためか、美術史などの閑事に携わることはますます疎んぜられるようになり、私たちの専門の学生数は減ずるばかりで、全然いないことが数年続いたりした。教授会では〈美学美術史学専攻〉を廃止しようという案が出されたこともあるらしい。茅野先生は〈芸術学専攻〉に改め、その専攻の範囲を拡げることによって、やっと廃止を免がれるようにしたといわれ、これはみな君の将来のためだ、とも付け加えられた。このように専攻の名称が改められたため、私は〈芸術学概論〉という新しい講義をも担当することとなった。平田という古い塾員の方の、アメリカで勉強した建築家の令息の夫人が女子聴講生として来られた。私たちの学生の頃、松本 泰氏夫人がヨネ・ノグチ先生の英文学を聴講に来られ、三田山上に一種のセンセーションを引き起こしたが、これで平田夫人は女子学生第二号となる。またその令息は戦後にわれわれの専攻で学ばれた。

私の同級生たる今宮君や新館君やまた奥野君はじめ若い諸君は続々と海外へ留学して来て、新進学者として盛んに活躍していた。これに反し私はいつまでも自分の専門とする西洋美術に関して直接的な見聞を広めることもできず、徒らに脾肉の嘆に耐えられなかった。

前述したように私は日本美術に対しては常に関心と熱情を失わなかった。その頃、幸に文部省から若干の研究費をもらったから二夏続けて京都大徳寺の塔頭聚光院に長逗留して、殊に桃山時代を中心とする諸寺の襖絵を見学した。この塔頭は三千家の菩提寺で、利休の墓や茶室があって有名であり、また私にあてがわれた方丈の一室の隣りの諸室には狩野永徳の傑作たる水墨花鳥襖絵をはじめ幾多の卓れた襖絵があった。

非常時ということで官立私立に拘らず、どの大学も海外留学は厳禁されることとなった。ただ一つの道は向うの国の奨学金をもらって行くことで

七十年の幻影

あった。ドイツにはフンボルト財団があって、そういう好意を示してくれた。ただこの特権は在来は殆んど官立大学に限られていたが、次第に私学にも及ぶこととなったらしい。茅野先生は前からいろいろと配慮されていたが、留学生の選択などを司っていた日独協会への先生の御推薦により、私はついにフンボルト財団の給費生として1箇年半ドイツへ留学することとなった。

昭和14年の9月の初めに出発の予定であったが、折から第二次世界大戦が勃発したため、中止することとなった。しかしやがて小康を得たから、いよいよその暮のクリスマス少し前に箱根丸で神戸から出帆した。敵船と間違えられないように船腹には大きな日の丸の国旗が描かれて、航行を続けたが、一寸悲壮感があった。上海では一と巻の画仙紙を求めた。向うで絵をかくためである。シンガポールを出帆するとき、荷積みや何かのために数百の労働者が埠頭に蝟集していたが、それは全部土人であって、使役するイギリスの官吏は二、三人に過ぎなく、さすがに大英帝国の威力というようなものが実感された。印度洋における落日の壮厳さには全く心を打たれ、大乘仏教のシンボルとさえ思われた。スエズ運河を渡るとき一泊でカイロまでいった。エジプト美術の偉大さをつくづく味わった。

昭和15年の2月初旬ナポリに上陸した。ホテルでは私を<教授>が訪ねて来られたというので驚いて会ってみると、ワグネルで活躍し、塾を出たS氏で、イタリアへは元来、声楽を勉強に来たのだが、いまではナポリ大学で日本語を教えているとのことであった。私にとっては多年の憧れの的であった土地へ来ていよいよポムペイはじめ美術の見学に興奮と感激の日が続いた。ローマではバルベリーニ広場にあるアルベルゴ・アレッサンドロという旅館へ泊まった。その部屋のなかには一種特有の甘美な香気が漂い、何んとなく<永遠の都>が感ぜられた。ここでも塾出身のT氏の訪問を受け、いろいろと便宜を与えられた。それから五日間ばかりイタリアの各地を旅行し、目ぼしい教会堂や博物館を見学した。さきを急ぐことと

てドイツ入りとなった。ブレンナーの国境では夜間車中で食券が交附され、身が引き締まる思いであった。2月中旬、厳冬の真只中にベルリンへ着いた。まずフンボルト財団の本部へ出頭して、いろいろの手続きをすませた。次にドイツにおける東洋美術の最高権威で、博物館総長たるキュムメル博士にお会いした。諸先輩から紹介状をもらっていたからである。博士はいろいろと助言を与えられ、また私の目的地たるミュンヘン大学のヤンツェン教授などへも紹介状をいただいた。また東京からの紹介状があったから正金銀行の支店長を訪ねた。そこにもたまたま私の教え子であったという斉藤君がいた。同君にはその後いろいろな点、殊に経済上で私は大変にお世話になって厚く感謝している。

*

ミュンヘンへ私が滞在することとなった時に、邦人は私のほかにK海軍少佐と、経済学のA君、ドイツ文学のN君の二人の留学生がいたに過ぎない。邦人はみな好んでベルリンへ集まっていたからである。私の下宿は高級住宅地ボーゲンハウゼンのアイダム家で、そこに1箇年半を過ごすこととなった。イザール河を渡り、イギリス公園を横ぎって大学へ通った。ヤンツェン教授の主としてドイツの中世美術史とブショア教授のギリシア美術史とを聴いた。まず愕いたのは、大教室が立錫の余地もないほど男女学生で満員であること、殊に女子の多いことである。当時のわが国の状態と比べて、全く嘘のようであった。尤も戦後になってわれわれの美学美術史の教室も殆んど同じような現象を呈するにいたり、感慨深いものがある。但し、一つ違うことがあり、座席の最前列には老紳士や老淑女がずらりと並び熱心に傾聴していて、音楽会や劇場におけるような満悦の表情に輝いていることである。このようにドイツではどの大学も講義が一般市民に公開されていて、さすがに学問の国だと羨ましくも思われた。ヤンツェン教授はいうまでもなくヴェルフリン教授の高弟で、その後継者である

が、私がヴェルフリン教授の主要著作の翻訳者だというので特別の好意を示されたようである。私は教授の美術史ゼミナールへも出入することとなり、ここでもまず愕いたのは、専門学科に関する文献や資料の余りにも龐大なことである。殊に〈インヴェンタール〉と称する作品目録の完備していることである。漫然と西洋美術の研究といっても、われわれ東洋人には到底越え難い限界のあることをますます痛感した。また〈美学〉という学問についてどんな大学でも講座が殆んど設けられていないことである。それはドイツではいわゆる〈哲学的美学〉はすっかり過去のものとなっていたからであろう、と一応は考えられ、この点は私にとって一つの重要な課題となった。美術史ゼミナールでは殆んど毎土曜日に市内や近郊にある数多の教会堂や修道院や宮殿などの見学が催された。ただ目ぼしい博物館は閉鎖されていたから絵画や彫刻は十分に見学することができなかつたのは私にとって遺憾至極であった。従って専ら建築に私の関心が注がれることとなった。各様式の西洋建築は東洋人にとっては到底比類を見ない独自にして優秀な文化的所産であることが明かとなって来た。この時、バロック様式の壮麗さなどはじめて知った。

ここで戦争のことに一寸触れると、ドイツとフランスとの戦いはまさにたけなわで、ミュンヘンへは時々仏機の夜間の空襲があり、そのたびにサイレンで眠りからおこされ、地下室へ避難した。しかし仏機は大抵撃退された。家人に勧められ、一度私は空襲のとき窓からのぞいてみたが、仏機は非常に高度の空中にあり、四方八方からサーチライトを浴びて小さい白い蚊のように見えた。それ故これを一般に〈モスキートー〉と呼んでいた。その頃、ただ一度ミュンヘン市内に爆弾が投下されたことがある。それはイギリス公園のなかと、美術館〈アルト・ピナコテーク〉の建物的一部分であった。第二次世界大戦におけるドイツ側の第一回の空爆の被害であり、市民の好奇心さえ引き、沢山の見物人が集まった。私も大学への途中だったから、イギリス公園の現場を見たが、地面に四、五メートル位

の深さの穴が穿たれていた。またこの6月17日かには仏軍が降伏した。それ以後は当分のあいだドイツ人には戦勝と歓喜との日々が続いた。間もなくムソリーニがミュンヘンにヒトラーを訪問した。その日、私はたまたま市内に出ていたから、前者が後者の私宅を訪ねる行列にでくわした。マクシミリアン大通りの両側に充満した市民の歓呼の声に対し、この両英雄はオープン・カーの上に直立して並んで、右手をあげて答えていたが、その路上には着飾った多数の少女たちが胸にかけた籠から色々のバラの花をあらかじめ一面に撒き敷いていて、さながらローマ時代の凱旋將軍を迎えるような豪華な歴史的雰囲気醸し出していた。おそらくこの両風雲児にとってはこれが一番得意の絶頂でなかったろうか。またヒトラーの私宅は私の宿の割合に近くであったから、散歩の折、それが普通のアパートの三階かで、その入口をどこかのおかみさんが子供をつれてはいつてゆき、極めて庶民的なものであることを知った。人気取りにわざとこういう所に住んでいたのかも知れない。事実、彼は下層階級には非常な衆望を集めていたようである。

ドイツ政府はわれわれ在独日本人学徒にはなほだ好意的で、夏にはオーストリアの湖畔へ、冬にはチロルのスキー場へ招待して、一週間位合宿することができた。このことはわれわれだけに限らず、当時の交友国、或るいは征服国からミュンヘンへ多数の留学生が集まっていた、彼らに対してもいろいろな特典が与えられていた。〈レギナ・ホテル〉における殆んど毎週一回のダンス・パーティー、或るいは一日のバス遊覧見学の如き。

その年の暮、私はやはりドイツ側の招待で京大から留学していた生物学のT君と同道、一週間ばかり占領後のポーランドをワルシャワをはじめ、目ぼしい都市や田舎を自動車で巡歴して南方の旧都クラカフまで行った。そこのマリア教会におけるルネサンスの、偉大なドイツ彫刻家ファイト・シュトースの豪華な聖母祭壇を見た。また途中〈黒い聖母像〉が祀られていて有名なチェンストホハの大修道院を訪れたりした。

七十年の幻影

宿のアイダム家のクリスマスは新教ではあるがなかなか盛大であった。旧教の一学生が是非自分の家にもと招いてくれた。

シュワービング地区には一軒の中華料理店があったから、A君とともに屢々米の食事をたべに行った。奥の部屋には沢山の中国留学生が集っていて、一寸物騒に感ぜられたから、大抵入口に近い卓についた。ウェイトレスははなはだ親切にしてくれ、また時にはガリ版の小さい紙片をそっと渡してくれた。それは<抗戦>と称するベルリンで出されていた中国人だけの新聞で、われわれにはわからない中国側のニュースが載っていて、A君には特に興味があったらしい。しかし私にはそのガリ版の文字が余りにも立派で、私の好きな碧巖録の圓悟の書にも劣らないもので全く愕かされた。さすがに東洋芸術の本場だけあった。

昭和16年の早春に私はマグデブルグ、クェドリントブルグ、ゲルンローデ、ヒルデスハイム、ハノーバーなど低部ザクセン地方の諸都市からミュンスター、エッセンを通りアーヘンまで、それからケルン、ボンに出て、ライン河を溯って、途中マリア・ラーハの修道院（その当時おそらくアデナウアーもここに亡命？していたことであろう）に数日間泊めてもらい、更に南へ上り、コブレンツから右折、モーゼル河を溯り、ローマ時代の旧蹟に富み、キリスト教がはじめてドイツへは行って由緒のある、またマルクスの生地としても有名なトリールまで行き、また引き返して、ラインを溯り、マインツ、ヴォルムス、シュパイヤーの三つの著名な<皇帝大聖堂>を見物し、更に南方へと向い、スイス境のボーデン・ゼー湖畔のコンスタントツまで辿りついた。湖上に浮ぶ閑静な<修道院ホテル>で泊り、それから湖中の、折から淡雪が降り積った孤島ラウフェナウへ渡り、ドイツ最古の壁画が残る教会堂を訪ね、島の宿に泊った時は、欧州が戦渦に包まれているなどという現実はどこかへすっかり吹き飛んでしまっていた。リンダウでこの湖と別れ、ミュンヘンへ帰った。この旅行でドイツ中世建築の主要作品を観たわけであるが、私は従来とてもゴシック様式には大変心を

惹かれていたが、この旅でロマネスク様式の美しさと崇高さに眼を見張ることとなった。

*

1箇年半という留学もそろそろ期限が切れることとなったから、シベリア経由で帰国の準備に取掛った。ベルリンへ出向き、ソビエトの交通公社のような所で切符を求めたが、どうしても許可してくれない。その6月には独ソ戦がはじまり、決定的に帰国の路は閉ざされた（外交官、軍人は別らしいが）。ただ一つ陸路ペルシア湾まで行き、そこから船で帰るという可能性があり、大使館もそれを勧め、とにかくベルリンへ来るようにとのことで、いよいよミュンヘンを引払うことにした。一応はペルシア湾までの近東諸国の領事館から旅券に許可をもらうことにした。しかしやがて東亜の戦局は大変なこととなり、帰国は全く絶望的となった。私はいよいよながらやむを得ずベルリンに滞在することとなった。この首都を私が好まないのは、余りに近代的で伝統性に欠けていることである。また日本人が多過ぎ、それに外交官や軍人が意張っていることである。冬の学期から、ベルリン大学へ通い、ウィルヘルム・ピンダー教授の近世美術史とキムメル先生の日本美術史の講義を聴いた。ニコライ・ハルトマンの講義に時々顔を出したが、到底解るようなものでなかった。そのほかは、民族博物館のなかにある美術図書館へ通って、主に聖母美術に関し、或るいは意の赴くままに稀覯書をも借出して閲覧した。

その頃、塾員で新聞社の特派員が数名ベルリンにいた。〈読売〉の牧君、始め〈報知〉で後に〈読売〉の川崎君。〈毎日〉の若山君、山本君などで、諸君とは時々会食し、特に川崎君は私の教え子でもあるからいろいろの便宜を受けた。

この冬には日独学徒交歓の大会がチロルのザンクト・クリストフで催された。スキーの本場であったが、私はただ手を拱いて見ているだけであっ

た。ただこの大会では日本学徒たちの各自の研究発表のようなものがあった。私も西洋美術との比較における〈日本美術の特性〉についてはじめてドイツ語で講演した。日本人たちは何のことやら解らないらしく殆んど黙っていたが、ドイツ人たちからは盛んな拍手が起こった。ベルリンへ帰ってから、同地最大の新聞、略称D・A・Z・紙上にこの大会の詳しい記事が出て、そのなかで私の講演が一番出色のものだったと書かれたから、私はドイツの日本学者の間で一躍にして有名になったようである。

昭和17年の2年だったか、厳寒の夜のことであったが、私はベルリンの考古学研究所の講堂で講演するように頼まれた。キュムメル先生の御好意でスライドは先生の研究室から何んでも何枚でも借り出すことが許された。先生のところには東洋美術に関するスライドは四千枚位あり、それが綺麗に整理されているのにはさすがと思った。私の講演が終ると、最前列で聴いておられたキュムメル先生がまず立ちあがり、私のところへ来て握手を求められたが、その時の私の感激は到底忘れることができない。

ベルリンの空襲はますます激しくなった。

その春の4月の終りに私はイタリアへ二度目の旅に出た。ローマには三国同盟華かなりし頃とて駐伊日本大使として塾の大先輩たる堀切善兵衛先生がおられ、いろいろと御配慮にあずかることができた。まず宿だが、大使館に勤務するイタリア学者金倉英一氏のアパートに同居させてもらって幸であった。そこを本拠として思う存分に各地を巡遊してイタリア美術を見学することができた。ローマではいたる所の家屋の壁面に満開の藤の花の大きな房が垂れさがって全く壮観であった。またヴァチカン宮では、日本からの紹介状もあり、ピオ十二世教皇に拝謁することもできた。1箇月位のイタリア滞在の後ベルリンへ帰るとすぐまた帰途の高田博厚氏と同道してフランスの旅に出た。パリには二週間ばかり滞在した。パリはローマに比べると歴史も浅く、また田舎という感じがなくもなかった。その間にシャルトルとアミアンのゴシック大寺院へ詣でた。

その夏頃からライプツィヒ大学に就職するという話が持ちあがっていた。私は帰国する時期がいつ来ることや目当てもつかず、全くニヒリスティックな気持ちにさえなった。おまけに私の留守宅は最初の東京の空襲にやられ、しかもそれはだいぶおくれてソビエト経由でベルリン支局へ空輸されて来る毎日新聞によって知った。私は単なるショック以上のものを味わった。

その10月から私はライプツィヒへ移った。はじめの宿はフロース広場に面した日独学生寮に当てられ、兼ねてより私のために特別の一室が新装して準備されていたのである。また私がライプツィヒ大学に勤めるに至った理由は、同大学には<日本研究所>があり、その主任教授ハミッチェ博士が応召されたため、その後任として私が選ばれたのである。私の担当は日本語の教授と日本美術史の講義であった。日本語の教科書として、かつて長くわが国に滞在したことのあるマイスナー氏の著した日本の口語文典（東京、教文館発行）と国定教科書であった。もちろん上級になるとむづかしいものとなった。最後には<方丈記>やいろいろの俳句を使ったこともあり、非常に興味を持たれたようである。学生数は平均して男女合わせて十四、五名であり、なかには銀行員、牧師の夫人、大学教授などもあった。以前から日本語をやっていたシュライバー嬢が研究所の助手を勤め、いろいろと私を助けてくれた。日本研究所の教室はライプツィヒの本通りたるグリマイシェ通りに面した建物の三階にあり、また通りへ出て左へ一町ばかり行くと、左側にゲーテの<ファウスト>のメフィストフェレスで有名な<アウワーバッハ・ケラー>の酒場があり、また更に三町ばかり行くと、バッハで知られるトーマス教会がある。それ故に、大抵は夕方私の授業が終ると、帰りには学生たちと酒場で休み、或るいは教会における少年合唱団の練習を聴いた。

ライプツィヒには日独協会があり、フライベルク市長、主事レーマン博士、名誉領事フェーゼ博士などの大変な肝入りで毎月の例会はいうまでも

七十年の幻影

なく、そのほか各種の催しがあって、はなはだ盛大なものであった。また大島大使はじめ大使館からも時々来賓があった。その都度、私は引張り出された。私はまた市長の賓客としての待遇を受けていたから、〈ゲヴァント・ハウス〉の音楽会や〈新劇場〉^{ノイエス・テアター}のオペラやその他演劇には時々招待を受けた。私はミュンヘン滞在中から折に触れ画仙紙に絵をかいていた。北欧の古い建築様式たる木骨煉瓦造りの民家が大変面白く、それを取り入れた風景を随分かいた。また花は好きだからいろいろと取扱った。そうした水墨画めいた作品がだいぶたまり、それを謝礼の意味で知人にも贈っていたから、日独協会の懇望により私の個展を開くこととなった。会場はグラス博物館の一室であった。あとでいろいろと新聞の批評も出て、^{ファイリグラシオン・ツァルト}金銀線細工の繊細さの線描が感興を引いたようである。またオランダの壺にタンポポのような黄色い花を挿した図に、高青邱の七言絶句の讃をした一作は〈ライブツィヒ・グラフ〉に掲載された。

学校の授業のほかに、私は時々、日本美術についての講演を頼まれた。前に二回それをやったことを述べたが、その後諸所の大学、研究所、日独協会などから依頼され、全部を通算して十八回以上に及んでいる。美術とか音楽に一般の市民も非常な関心を抱き、戦争中にも拘らず、その会場はいつも満員であった。講演についてはいろいろと懐しい思い出があるが、特に一つの忘れられないことがある。昭和18年の秋の始めである。私はウィーンの日独協会からその依頼を受けた。丁度その頃はイタリアが無条件に降伏し、駐伊大使であった堀切先生はドイツへ逃れて、中央アジア経由で帰国しようとして、その手続がなかなかはかどらず、已むを得ず、ウィーンで長らく待機されていた。私は商工会議所かの講堂で講演した。大使も御出席され、大変に喜んでいただいた。2、3日の私の滞在中、大使は御自分のホテルへ会食に誘われ、いろいろと御馳走になった。ローマでも御配慮にあずかったのだから、私はますます恐縮の至りであった。その数箇月後にライブツィヒの私あてにウィーンの日本の総領事から来状があり、

大使はやっと帰国の途に就かれたが、その際に君に同封の金子を送るよ
 うにとのことであつたから、というのであつた。私は愕いた。貧学究にとつ
 てなにがしの金子は感謝の至りであるが、またそれ以上に大使のこまやか
 なお心づかいに深く打たれ、私は独りで泣いた。

私は元來音痴で、殊に西洋音楽について全く無知でまた興味も覚えな
 かつたが、いわば近代音楽の発祥地たるライプツィヒに2箇年半の滞在を余
 儀なくされたためにどうかこうにか音楽に耳を傾けるようになった。ま
 た学生寮がドイツ学生で幾分騒がしいために私は静かな年老いた未亡人一
 人の家へ移つたが、それはロバート・シューマン通りであり、その近くは
 ヴェートーベン通りとか、その他音楽家の名前ばかり冠せられ、また<ゲ
 ヴェント・ハウス>もあり、あたり一帯を<演奏会地区コンサート・フィアテル>と称せられて
 いた。私は講演のため諸都市へ旅行したほかに、折に触れ、小都会へ一
 泊、或るいは四、五泊で遊びにいった、ドイツの田舎町の面白さ、良さと
 いうものをつくづく味わうことができた。それは大抵城壁に囲まれ、中央
 の広場には古雅な教会堂や市役所が聳え、また前述の木骨煉瓦作りの諸民
 家が並び、中世紀以来の伝統と独自の文化に富むものが多く、世界的に有
 名なローテンブルグ、ディンケルスビュール、ノルドリンゲンはじめ、そ
 の名前を挙げると数え切れないほどである。都市そのものが一種の芸術品
 であり、一生住んでみたいと思うほどに魅力をさえ感ずるものもあつた。

またドイツでは、人口五千以上の田舎町には必ずといってよい位に、
ハイマートムゼウム郷土博物館があり、そこにはその土地や住民に生え抜きの特有な陶器、金
 工、木工、染織、更に服飾、家具の類にいたるまでの民芸品フォルクスト・クンストが多数に見出
 され、全く心温まるものばかりである。これは私の<ドイツ田舎町趣味>
 というべきものの副産物の最大の一つである。また大都会のいわば上手も
 のの博物館が閉鎖されていたことじょうての不満はこれで十分に充たされもした。
 インスブルック(今はオーストリア)、ワッサーブルグ、ナウムブルグその
 ほか多数の諸都市における郷土博物館の思い出は懐しい限りである。また

副産物の一つに田舎町のホテルがある。古い民家を改造したものが多く、歴史と郷土性に富み、床しい落ちつきがある。

滞独中、私は風邪にかかることもなく、殆んど病気をしなかったが、それは夏になると、全裸体で日光浴ゾンネン・バードをしたことと毎朝冷水摩擦をしたことのためだと思っている。これはミュンヘンからの慣わしだが、殊にライプツィヒでは、公園の芝生に、その特別の場所が設けられ、多数の家族づれがそこで日光浴していた。そうして私はしまいには日光を受けながら読書しても平気であった。＜老子＞の独訳を耽読したのもその時である。ただ歯医者だけへは時々通った。

ライプツィヒ大学では同僚としていろいろの学者と親しく交わった。美術史のヤーン博士、ベエンケン博士、シュヴァイツァー博士、言語学者のユンカース博士、ハラゾウィッツ書店の顧問の東洋学者エルケス博士、その他であって、なかには時々お茶によばれ、家庭的にも親しくなった。ドイツの学生も次々と軍隊に召集されたことはもちろんであるが、ただその期間が比較的短く、すぐ戦線から帰還していた。それ故に軍服のままの学生が大学にいつも氾濫していた。＜日本では3年間も戦線に出ていると聞くが、余りにも非人間的ではないか＞と或る同僚の教授がいわれたことがある。＜学徒出陣＞などということは全く思いもよらなかった。

また私は大学に就職して、一種の公務員であり、そのための義務があった。兵役と納税とであるが、前者は外国人であるがために免除されていたが、後者は免がれることができず、いつも一定の額を納めていた。ライプツィヒにながらく滞在して一つの不満があった。それは宗教上の理由で、私がはじめミュンヘンを選んだのは、そこが旧教圏に属し、＜聖母フラウエ教会ン・キルヒエ＞はじめテアティーナー教会、ヨハネス・ネポムーク教会など、その立派な教会堂が沢山見出されたが、これに反し、ベルリンやライプツィヒはいわば新教圏であり、日曜日などに訪れようとする教会堂が殆んど見つからなかったのである。或る歳のクリスマスの晩に、場末でやっと旧教の

小さな一つの教会に行きつくことができたが、それは表現派的に装飾されたいかものであった。

日独協会の会合などで屢々会い、私はブロックハウス書店の主人ハンス・ブロックハウス氏と親しくなった。ついに氏は私に向い日本美術に関する本を書くように依頼された。資料も十分に備わっていないから、なかなかの難事業であったが、東西美術の比較という私独自の立場がようやく確立されるにいたっていたから、とうとう引き受けることとなった。写真も百枚以上入れるようにとのことであったから、〈日本の絵画〉の原稿が大体できあがってから、ベルリンのキュムメル先生の研究室へ行き、写真は諸図録から四ツ切りの大きさに複写してもらった。尤もこの原稿を書いているあいだには、屢々空襲があって、地下室へのがれたが、かつてヘーゲルはイエナで、ナポレオン戦争の砲声を聞きながら〈精神現象学〉の著作をしたことなどが思い出され、一寸悲痛な気持を覚えた。しかし戦争は次第に破局に近づき、ますます危機は迫っていた。実は去る昭和18年12月上旬、ライプツィヒの大空襲によって都心部はじめ私の下宿も爆撃を受け、またブロックハウス書店の宏壮な建物もやられた。出版どころの話でなかった。しかし私の原稿は二部タイプで写し、その一つずつを書店と私とで保管することとなった。前述の大空襲で私は蔵書をはじめ衣類などの大部分を失った。幸に日独学生寮の建物は難を免れたから、私はまたそこへ寄宿することとなっていた。

*

昭和20年2月16日にベルリンの日本総領事館からすぐ来るようにとの電報が来たから、翌日出頭すると、最後の破局も近いから、日本人会を中心として在留邦人は安全な一箇所に避難する計画があり、是非参加するようにとのことであった。その候補地としてベルリンの西南十七、八里位の小さな田舎町ベルリッツが選ばれ、数人の世話人が先発していた。私も〈動物

園の駅からローカル線でそこへ行った。しかし参加人数もふえるばかりで、もっと安全で広大な避難地が必要とされ、この町から更にバスで数里奥まったマールスドルフ村が決められた。ここは全くの寒村で数軒の農家はあるが、北方には東西四里、南北二里の大森林が横たわり、それを背景に旧貴族たるフォン・シュヴェーリン家の大きな城館がある。フランスのヴェルサイユ宮殿の規模を縮小したもので、ドイツの諸所にも見出される。この建物の上下二層にある数十の部屋をわれわれは借りることができた。まず準備のために、3月4日、私を加え、内務省の故S氏、総領事館のI氏、大倉組のO氏などが入城した。主人は六十才を越え立派な風采の老紳士で、もとは軍人だったらしいが、政治的理由からか、一切の俗事から離れていたようである。夫人はハンガリアの貴族出身で、伯爵夫人と召使たちから呼ばれ、五十才にはなっていたらうが、子供もないため、美貌で若々しく、この城館といい、またこの夫妻といい、動乱のヨーロッパでは全く思いもかけぬ存在であった。最初のうち、われわれは、料理人もいなかったため、レムブラントの大作<カナの結婚>の模写が懸かっている食堂で、この夫妻とともに数人の侍女にかしずかれながら饗応を受けた。それはいわば手料理で、森でとれる鹿の肉とか茸の類が多かった。夫妻は、私が美術史の教授だというのか、心を許すところがあり、また話題も多かった。ついにその図書室をもすっかり解放してくれた。蔵書は古典から近代に至るまでのあらゆる領域に及んでいた。

或る日、フォン・シュヴェーリン氏は、やっとガソリンを手に入れたから<教授>だけには見せたいといって、車庫から自動車を取り出し、私を乗せみずから操縦して、森林のなかに縦横に通じた路を案内してくれた。途中、鹿の群が跳び立ったりもした。またグリムか、ハウフのお伽噺に出てきそうな森林官のロマンチックな可愛い家へ立寄り、お茶をいただいた。

ベルリンからは続々と邦人が移って来た。日本政府の各省からの駐在員

はじめ三井(三菱だけは別行動)や大倉組やその他の各種の商社の出張員などがあり、いよいよ本格的に避難所の設営に取り掛った。まず邸内に数箇の井戸を掘る必要があった。次にベツトであるが、二段の簡単なもので、近在の製材所へ頼み、百箇余を作らせた。一番大切な食糧は大体三週間分をいつも準備されていた。そのために数頭の豚まで飼育した。こういう方面のことは、上述の役人や商社の方々にベテランがそろっていたから、すらすらと進捗した。私が一役買ったのは、洗面器や水瓶の調達である。邸の裏の森のなかを二里ばかり通り過ぎると、民芸の窯場があると聞いて、私は自転車に乗って行ってそれを注文した。あたかも植民地の経営に似て興味さえ持たれた。参加者は日に日に増し、4月13日には大体の予定者が集まった。学生、画家、商人、曲芸師などあらゆる階級の男女合せて百四、五十人に達したであろう。戦局は西方からの英米軍が次第に迫り、その20日頃からは砲声が聞こえ、われわれはますます厳肅さを覚えた。しかしエルベ河畔のマグデブルグあたりまで達したと思われると、ぱったり砲声はやんだ。その25日にはソ軍がベルリンへ突入し、5月はじめにはそれをすっかり占領した。その4日早朝に、元来はわれわれを保護するためにソ軍がマールスドルフへも現われた。婦人たちは屋根裏へ身をかくした。私はその頃、所在なさに、1943年に出版されたハイデンライヒの大著<レオナルド>を翻訳していた。こういう最大の危機に際しては、自分としては最高の課題の一つに取り組むのが何よりと思われたからである。また図書室にはヴァザーリの<ルネサンス美術家列伝>の独訳六巻が見出され、大いに参考になった。兼ねてからベルリンの<日本研究所>の好意でその所蔵の各種の日本の書籍が数箱も貸与され、一般の閲覧に供せられた。私はその管理者となっていた。また日露戦争以前からロシアで雑貨商を営んでいた遅しい一老人からわれわれはロシア語を習った。シベリア幽囚の日が待ち設けているかも知れなかったからである。5月13日には入城1箇月を記念して城の南側の庭園で芸能大会のようなものが開かれた。ところがソ軍の

若い兵士たちはどうしても参加を求め、〈ヴォルガの舟唄〉のような民謡を盛んにうたいまくった。全く日本の百姓の若衆のように稚気があって面白かった。その18日、ソ軍の命令でわれわれ日本人はベルリンへ移されることとなった。一同は大きなトラック（これはみなU・S・A・製）に分乗し、途中、痛ましい廃墟となっていたベルリン市街を通過して、その東部のリヒテンベルク駅の近くの民家に、その夜は分宿した。20日の午前この駅を出発、特別列車にて帰国の途に就くこととなった。25日の朝、雲がそば降るモスクワの駅へ着いた。実はここでわれわれは降ろされ、当分監禁を余儀なくされるのではないかと危ぶんでいたのだが、あっけなく別の食堂車まである列車に乗換えさせられ、その日の夕方にはシベリアの旅へ出発することとなった。6月にはいるとバイカル湖畔にかかり、3日には国境を越え、その夕方に満州里着。途中ハルビンで一泊。6日午後新京着。ここに22日まで滞在することとなったが、その理由は満州里の税関におけるわれわれの荷物の検査が大変手間取ったからである。この新首都におけるいろいろの施設を見て、日本人の植民政策がいかに軽佻浮薄なものであるかを見せつけられた。ただ一日、私は洋画家大兼君と旧都吉林を訪れて、その公園の四阿あずまやに懸けられた数多くの聯の何紹基の書の立派さを見て、つくづく東洋へ帰った気持になった。22日午後新京発、翌日の午後朝鮮の羅津着。25日午後、帝立丸にてここを出帆、いよいよ日本海を渡り、29日午後敦賀港へ到着した。しかしこの航海が戦争中において私の一番危険にさらされた経験である。朝鮮半島の沿岸の近くを航行し、普通一昼夜位のところを5日かかった。それは絶えず米機に狙われ、いたる所に機雷が浮いているから、われわれはいつも浮袋のようなものを胴体に巻いていて、いざという時はできるだけ早く陸地へ辿りつく準備のためである。6月30日私は郷里大垣へ帰着することができた。予め電報しておいたから、疎開して、もんぺをはいた妻と娘が駅へ出迎えていた。娘ははじめ私になかなか馴まなかった。何分、足掛け7年ぶりに外遊から帰ったのだから、当

然であろう。まず愕いたのは、5月に母方の祖母が九十幾歳で、また母が六十八歳で続いて亡くなっていたことで残念至極であった。家では東京や名古屋で戦災に罹った親戚や、そのほか同様に罹災した支店の家族たちが多人数で寄寓して、あたかも飛驒白川郷しらかわごうの大家族制のようだと、みなで笑った位である。私は日本流になかなか坐れず、また何かにつけ勝手ちがいのことが多かったから、みなに〈今浦島〉とひやかされもした。

私は早速、学校へ無事帰国したことを伝えたら、すぐ出頭するようにと返答があった。その頃は地方においても次第に空襲がひどくなり、不安はつのるばかりであった。やっと7月25日に幾分危険の少い中央線で上京することとなった。東京の親戚は大抵青山附近にあって罹災し帰国したが、ただ弟夫婦だけは止まり、南町の或る旅館に寄寓していたから、そこへ私は泊まった。29日に小林先生にお会いして帰朝のご挨拶をした。翌日塾で土産話をさせられた。8月3日に安倍校長の御依頼でやはり一高で話をした。その途中など屢々空襲ではばまれた。11日に中央線経由で帰郷した。その留守中に大垣は空襲に会い、特に中心部はひどかったらしい。廃墟の町のなかを歩いて、遠くからわが家が望まれた時はほっとした。西隣りの二軒は罹災されてお気の毒であったが、幸にわが家は難を免れた。

*

8月15日に終戦を迎えた。その後は日本は一つの新しいエポックにはいり、その記憶がなお新しく、また私のいわば公的生活については単調であり、平板であり、また一般にもよく知られているから、ここでは専ら私的生活について、しかも肝要な点だけに触れることにしよう。

9月にはいり、家族たちを郷里に残し、私だけ上京した。文学部教授に任命され、授業は10月から始まった。三田山上では大ホールはじめ、幾多の建物が罹災し、ここも一種の焼野が原であり、そのなかで復員した学生は軍服のままで、その他の学生も思い思いのひどい服装で講義を聴き、殺

風景極まるものであった。教師、学生ともに弁当持ちで、栄養失調一步手前の者ばかりであった。私は尾山台の、中央大学へ通っていた甥の下宿へ寄寓した。この家は、昔から私の生家へ出入りした芸者が、いまは老妓となりその娘とともに暮している所で、利口な女だから、よく世話をしてくれた。

昭和21年8月、恩師茅野先生御夫妻が続いて亡くなられた。お宅は戦災に罹り、目白の女子大の寄宿舍に寄寓されていた。丁度私は郷里から味噌のひと包を持って来ていたから、それを持参してお見舞にあがったが、もはやお目にかかることは許されなくて、はなはだ残念であった。

昭和23年の9月から家族たちも帰京した。私たちには家もないこととて、巣鴨にある、戦災を免れた、妻の妹の家にみなで寄寓した。私たちは生活的に困窮の極にあり、また社会的には敗戦後の惨状に目もあてられず、そういう日々の苦難、哀愁から免れるため、私は何か一つの仕事に没頭しようとしてヴィンケルマンの〈古代美術史〉の翻訳に取掛かった。こういうことは私の一種の常套手段であった。美術史では最高の古典でまた難解なものである。多数の引用されたギリシア・ラテンの文献が略号で殆んど毎頁の脚註として並んでいる。それらを一応は解釈しなければならぬ。その質疑に答えてもらうために、上智大学へゆき、キリシタン研究で有名なラウレス神父をつかまえた。いろいろと親切に教えていただいた。親しくお話をしているうちにカトリックの信者になるように盛んに勧められた。私は内心ではそれをむしろ希っていたのだが、教理の勉強の時間が十分になく、またどうしてもまだそこまで踏み切れなかった。神父様はその数年後、千葉病院において癌で亡くなられたが、その御病気のことを松本正夫君から伝えられ、お見舞に行った時は、床の上に起きあがって喜ばれ、アメリカ製の小缶入りのビールを二人で乾盃して、〈君が来ないと天国が寂しい〉などと冗談までいわれた。

*

昭和24年4月から新制大学は発足した。この機会にわれわれの専攻の名称を以前のように<美学美術史学>と改めてもらった。またその頃、私は塾の茶道会やパレット・クラブの会長に推された。茶会をするにも、東京の茶室は殆んど罹災し、やっと麻布我善坊の三橋邸のそれを借りることができた。お菓子も薩摩いもにズルチンで甘味をつけた<茶巾しぼり>であった。その後次第に立派な茶会が諸所で開かれ、楽しかった。またパレット・クラブも昭和26年からは日本橋の三越で<全慶応美術展>を開くこととなり、両方の会ともますます隆盛に赴いた。

その5月私たちは小田急沿線の生田の丘の上にあった大学予科の仮校舎の構内のガレージの一部を改造した三間のバラックへ引越した。その頃、家族たちは喜多見のカトリック教会へ日曜日には通っていた。その大越菊次郎神父はいかにも聖職者にふさわしい立派なお人柄で、また親切な方であり、わざわざ私たちのバラックを訪問され、いろいろと慰問にもあずかった。それ故、私も折に触れ、教会へもうかがった。ここで朝日新聞社から依頼された、その新講座の一冊として<美学>を著した。大体の骨子はディルタイ派のヘルマン・ノールの著作に拠ったもので、出版は余り気が進まなかった。昭和26年4月、大学院が発足した。昭和27年春、日吉の自宅が完成して引越した。その翌年の始め頃、西独のブロックハウス書店から来状があり、<貴殿の宛名は丸善から知ったが、弊書店も西独のヴースバーデンへ移り戦後数年経て再び出版事業を開始することとなった。貴殿の原稿は戦禍のなかを守って救うことができた。いよいよ刊行したいから御諒承のほどを>という意味のものであった。私は早速もう一度手元にある原稿を訂正、また図版の写真も百枚余、主として東京国立博物館で作成してもらい、私自身で打ったタイプの原稿と写真とを西独へ空輸した。書物はその年のクリスマス直前に出来上がり、まず一冊を空輸して来た。

七十年の幻影

その立派さに自分ながら驚いた。その後、書店からは<ロンドン・タイムズ>はじめ欧米の新聞雑誌に出た書評を次々と送って来た。それが2、3年位続いて七十五点以上を数えた。それらのうちでいろいろと私を喜ばせたものがあるが、特にウィーン大学から出ている<美術史通報>のそれで、私をヴェルフリン学徒の一人に数えていることである。滞欧中、ヴェルフリン先生にはとうとうお会いすることができなくて遺憾であったが、これで私は全く本望である。またミュンヘンで師事したヤンツェン教授からも来状があり、<君はすっかりドイツ学界で有名となった。また自分の専門外だから何も批評はいえないが、沢山の図版の選択は素晴らしい>とのことであったが、日本の学者では、あの学問上極めて厳格な福井利吉郎先生からお褒めの言葉をいただき、丁度その頃出版されたアメリカ最高の日本美術学者ウォーナー博士の<不滅の日本美術>（朝日新聞社刊日本訳名）よりは君の本の方が優っているとのことであった。また前橋の川合先生からはお喜びの七言絶句の漢詩を贈っていただいた。

昭和29年8月、私は文学博士となったが、これにはいささかいきさつがある。その数年前、旧制の博士号は打ち切られるとのことであった。若い同僚の諸君は次々に学位を得られた。船田先生は君も学位をもらったかどうかといわれ、その頃<史学>に発表した君の論文<ルネサンス美術における人間の表現>を読んだが、あのようなものを二、三篇書けば、君にもその資格があるとまでおっしゃった。私はそれに殆んど耳を傾けなかった。私の尊敬する恩師には安倍先生や小宮先生などがあり、これらの先生はみな夏目漱石の弟子であり、従って私は漱石の孫弟子に当たっている。塾にいわゆる<漱石山脈>の一支脈があるとすれば、私たちが一番それに近い。漱石が博士号を辞退した風懐はやはり私の心を惹くものがあった。また私は若い頃から無位無冠ということが何んとなく気持に合っていた。ところが、私の専門領域の友人たちには学位請求の論文を書いている者があり、彼らは私に早くそれらを審査する資格を持つように促すのであった。

私はその資格を持てば、彼らもまた学位を得ることができると思われ、また先輩のお勧めもあり、ついに〈日本の絵画〉(独文)を提出した。審査は成瀬無極先生と松本芳夫先生(はじめ金田 廉君も加わっていたが、病気のためやめられた)にしていた。またこの著作によって〈義塾賞〉までいただいた。

昭和26年頃から健康保険の制度が設けられ、塾の教職員は殆んどそれに加入した。また定期的に身体検査が行われた。私は高血圧症と診断され、それからは慶応病院へ通い、笹本先生の御診察を受けた。病状ははかばかしくなかった。金田 廉君も同じような病気であったが、症状は私より少し悪質であつたらしく、卒業生の謝恩会へ出席した時など、もうどうせ駄目だからといって、ビールを大いに傾けて、一寸沈痛な感があつた。病床に一度お見舞に行ったことがあるが、君は元来、篤学で、誠実で、清潔な人で、もっと早くから付き合っていたらよかったと後悔さえされた。君はその昭和30年9月の歿前に、奥様のお心づくしのためか、ついにカトリックの信者となられて幸であつた。

昭和30年10月31日に新館君はついに病歿した。生憎その時、私は学生たちと関西へ美術見学旅行へ行っていて、その訃報を京都の宿で受取つた。やつと葬儀には間に合うことができたが、彼との長い親しい交遊については次から次へと思い出されて悲痛の限りである。未亡人から頼まれた〈新館正国の思い出〉という未発表の拙稿がある。

私は、30数年の結婚生活のあいだ、日常、妻の心ばえや行状を親しく見ている、カトリックの信者というものに頭がさがることが多かつた。この宗教にはいることが自分には一番好ましいものと次第に思われて来ていた。ただ洗礼を受けるまでになかなかチャンスに恵まれなかつた。殊に少年時代から、篤信な仏教的な生活環境に育ち、ついに仏教の学校で一時は学び、場合によれば坊さんになったかも知れなかつたほどである。また青年の頃からは禅宗の雰囲気には特別の魅力を感じ、屢々禅寺に寄寓して、お

七十年の幻影

のずと名僧の語録や漢詩、殊に寂室禪師のそれなどに親しむことが多かった。しかし禪宗の本義たる<直指人心見性成佛>なども、神の本質を掘りさげることが足りなく、従って禪宗、例えば鈴木大拙のそれにしても、^{カルチユア}教養としては卓れたものであろうが、宗教としては不十分なものと考えられて来た。いずれ信者になるなら、ぼつぼつその準備をはじめべきだと思われ、いまは成城教会へ移られた大越神父へお願いして、時々来ていただき教理のお話を聴くこととなった。それが半年位続いた。私の病状は悪化して、ついに昭和35年8月3日の深夜、お手洗に立ちかけて脳出血で倒れ、そのまま昏睡状態に陥った。家人は驚いて、近所の主治医を呼んでいろいろと応急手段を講じたらしいが、私は何も知らなかった。私は<無限の暗黒>のうちに引き入れられようとして、急にうしろから力強く引き戻されるように感じてふと眼をさましたら、大越神父から洗礼を受けた瞬間であった。これはその日の晩のことで、やっと私は生き還ったのである。三週間ばかり家で絶対安静の状態に置かれ、やっと動かしてよいということで、慶応病院へ入院した。病床にあって静かに考えてみると、この病気はいわば<神の摂理>で、もしこのことがなければ、私は信者になることもできなかったであろう。入院して3、4箇月は、私は読書など字を読むことは禁ぜられていたが、それが許されたとき、妻はこんな手紙がドイツから留守宅へ来ていたと示した。それはブロックハウス書店からで、前の<日本の絵画>に続いて<日本の彫刻>について一著を書くようにとの依頼状であった。その達成はなかなか困難に思われたが、心は楽しい希望に充ちた。そこで7箇月間療養を受け、翌年の3月の始め退院することができた。庭の白梅が満開して主人を迎えてくれたことは全く嬉しかった。

左の手脚が不自由で、大抵は病床についていたが、次第に快方に向った。私は胃腸が割合に達者だから、栄養を十分に取ることができたからでもあろう。その4月の中旬、塾の西洋史を出た娘が、学習院大学を出て国鉄本社に勤めている蒲生義邦（蒲生氏郷の末裔と称する）と結婚した。そ

の結婚式や披露宴にも出席した。その頃から自宅でぼつぼつ大学院の授業をはじめた。学生は一人だったから、随分我儘をしたらしい。

その秋頃から学部の一課目の授業をはじめた。学生諸君にわざわざ日吉の教室へ来てもらった。その頃は杖をたよりに歩行の練習をすることが一つの日課でもあって、妻に付き添われ、塾の野球部のグラウンドまで行くこともあった。

昭和37年の4月からわれわれの専攻の大学院や学部の学生はますます増加した。その6月にヴェルフリンの〈古典美術〉の拙訳が美術出版社から刊行された（現在は第三版を重ねている）。

私の健康は漸次に回復した。昼間だけは机辺の仕事に携さわることにした。このように大体平生の生活に帰ることができたのは、信者としての精神的平安と、また学校当局や教授会の御好意によって私が自宅や日吉の教室で若い男女の学生諸君に親しく接することを許されたがためと、心から深く感謝している。またその頃からか、菅沼貞三君始め美学美術史学担当の同僚諸君数名に殆んど毎月一回、自宅に集まってもらって、専攻学科の諸問題、諸企画について親しく歓談することができたのも、いつも家に蟄居している私にとっては、いわば唯一の世間へ開かれた窓となり、はなはだ楽しい一日で、これは今でもずっと続いている。

私たち夫婦は信者として東横沿線にある菊名教会に属している。私が不自由な体のため、神父様に月一回わざわざ自宅まで御出張を願い、告白をして御聖体をいただく恩恵に浴している。この数年はニューヨーク生れのヘンリー神父が担当されている。この方は本年三十三才のお若さで、大変日本語がお上手であるから、世間話にも打ち興ずることがあるが、しかし一とたび聖職者としての発言をされるときには、全く威厳に充ち、さすがにローマ教会2000年の伝統と教権を背負ってられることとつくづく感嘆される。

その年の11月1日には故沢木先生の三十三回忌の記念講演会が開かれ、

七十年の幻影

小泉、高橋の両先生が演壇に立たれ、それを拝聴するため、数年ぶりに私は三田へ行くことができて何よりであった。

昭和40年9月中旬、私は日本橋、高島屋の画廊で、終戦後から病気になる前までに試みた私の書画の個展を開いた。安倍先生御夫妻に親しく観ていただくことができた。このこともまた幾分でも世間に接触したいという気持ちからであった。その折、三田芸術学会主催で交詢社の食堂に友人や教え子たちの多数が集まり、大変愉快な一夕であった。

その年の10月中旬、〈美学会第十六回全国大会〉を塾で開催した。その節、私は病軀を一学生に抱きかかえられるようにされて、演壇へ運び、〈日本における古典美術の問題〉について研究発表を試みた。自校が主催者の場合はできるだけ、他校の方に研究発表をしてもらうべきであるが、私があえてそれをしたのは、私ほもはや他校における大会ではそういうことがむつかしいからである。

また〈日本における古典美術の研究〉というテーマで、美学美術史学専攻の同僚諸君とともに私が代表者となって巨額の総合研究費を文部省から昭和41年、昭和42年の2箇年にわたりいただくことができた。西洋における古典美術はいうまでもなく〈人間美術〉であるが、東亜ではそれは〈自然芸術〉であり、しかも日本では自然の〈全体的把握〉即ち〈風景的〉モチーフでなく、その〈部分的把握〉即ち〈花鳥的〉モチーフのうちに求められ、この題材を取扱ったあらゆる美術の領域にわたる作品を研究することとなった。そのためにはまず桃山時代を中心とする莫大な数の襖や欄間の写真を撮ることとなり、同僚諸君は大学院学生を助手として、京都その他の社寺へ出張して、一昨年、昨年の休暇の大部分を費した。またこの方面の文献も殆んど集まった。しかし代表者たる私が最も肝要なものだけでも改めて観ておく責任があり、去年の11月始め、妻と二人の大学院学生を伴い、二泊で京都へ行き、西本願寺の白書院や二条城などを見学した。その際私が殆んど10年ぶりに上洛したというので、在京阪の教え子た

ちは、一夕南禅寺近くの或る料亭へ私たち夫婦を招いてくれ、全部で九人の盛大な饗宴が開かれた、私は涙が出るほど嬉しかった。

また、私は茶道会とパレット・クラブの会長を若い方にゆずった。茶道会では〈野ロルーム〉で立礼の〈謝恩の茶会〉を開いてくれ、またわざわざ地方から三、四の先輩も集まり、大変愉快であった。

いま私の家は、週数回の大学院の授業と、時々お手伝いさんが来るほかは、いつも老夫婦だけで、おやつには好んで〈お薄〉をいただく静かな日である。塾の英文科を出て、その方面の翻訳を仕事としている伴は裏の方に別居している。また娘はもはや二人の男の児の母となり、兄の方は幼稚園へ通っているが、その可愛い孫たちが、時々遊びに来て騒いでゆくに過ぎない。

昭和43年（1968）3月 擱筆